

文献に見る玉井喜作

——没後100年を記念して——

Documents and Literature on Kisak TAMAI

——In Memory of the Centennial Anniversary of His Death——

泉 健

Ken IZUMI

2005年10月11日受理

序

本稿が出版される2006年は、玉井喜作（1866-1906）没後100年の年に当たっている。これを機会に、これまで玉井に関して記された様々な文献、及び彼に深く関連する資料等を一度整理しておくことにした。

玉井は40年という短い一生の間に、様々なことを行っている。すなわち、札幌農学校のドイツ語教師を務め、単身シベリア横断という冒険を行い、ベルリンで『Ost=Asien』というドイツ語の月刊雑誌を刊行し続け、傍ら多くの絵葉書も作成した。彼は従来、シベリア横断の冒険家としてのみ注目されることが多かった。しかし近年、『Ost=Asien』の出版者としての業績や、絵葉書作成者としての側面も注目されるようになってきた。それに応じて、様々な新しい文献が現れ、同時にまた、玉井がベルリン大学在籍中に書いた古い文献もいくつか明らかになった。

本稿は、そのような玉井喜作に関するこれまでの文献を可能な限り渉猟し、彼の生涯に沿ってそれらを配列し、主要なものについてはその解題を付し、文献を通して彼の人生を浮かび上がらせようとしたものである。なお今回の調査対象からは、一通の手紙を例外として、パスポート・私信などの一次資料は省いた。以下に取りあげたものは、玉井に関する新聞記事、雑誌論文、単行本、人名事典、テレビ放送などの二次資料である。玉井に関係する文献は可能な限り集めたつもりであるが、まだ抜け落ちているものもあると思われる。それらに関しては、ご教示いただけると幸いである。

以下彼の人生をたどりながら、I. 修学時代、II. 札幌農学校、III. シベリア横断、IV. ベルリン時代、V. 帰国後の遺族、VI. 玉井喜作再発見の道のり、という順序でそれらの文献を考察していきたい。今回対象とした文献は、42—47頁に引用文献としてまとめ、本文中では出版年とアルファベットと頁数で引用箇所を明示した。なお本稿の掲載誌の性格上、本文の中では人名に対する敬称は略させていただいた。ご寛恕を請う次第である。

I. 修学時代

1. 私立獨逸学校と獨逸学協会学校との関係

1) 玉井の通った私立獨逸学校

玉井喜作は1866年（慶応2）5月18日に、現在の山口県光市で生まれた。生家は日本酒の醸造元であった。小学校時代は、山口と津和野の間あたりに位置する地福という村で過ごしている。そこには母の実家があった。そしてその後、山口の私塾で学び、やがて広島の中学校に行く。しかしそこには8ヶ月ばかりしか在籍せず、1881年（明治14）に東京の私立獨逸学校に入学した。従来の玉井の伝記では、この学校が現在の獨協大学の前身であるとされている（1989c；29、1998e；11）。しかし昨年の拙稿で指摘した通り、その時点では、獨協大学の前身である獨逸学協会学校はまだ設立されていない（2005b；29）。その後いくつか文献を調べてみると、獨逸学協会学校の設立以前に、東京でドイツ語を教えていた学校がいくつか浮かび上がってきた。

2) 3つの資料の中の「獨逸学校」

すなわち、宮永孝は「東京のドイツ語塾一覧表（明治十年代～大正初期）」において、そのような学校を49校挙げている（1993f；316-318）。獨逸学協会学校の設立は1883年（明治16）であるが、この表によれば、それ以前にすでに22校が存在していたことがわかる。その中に、明治12年頃に創立された「獨逸学校」（本郷区台町36番地）というものがある。

また『獨協百年』第1号には、明治十年代のものと思われる「東京府下獨逸私立学校及生徒概数」という一覧表があり、塾を含めて14の学校が紹介されている（1979b；382-383）。この一覧表にも上記の「獨逸学校」（本郷区丸山台町）が掲載されており、こちらでは生徒数も記され教員紹介もなされている。それによると、この学校ではドイツ語の教員のみではなく、算術や漢学の教員もあり、東京大学の教官が兼務している場合も多いことがわかる。そして同時代の他の学校の生徒数が20～50人前後であったのに対し、この「獨逸学校」は360人と圧倒的に規模の大きな学校であった。

さらに『獨協百年』第4号には、「旧獨逸学校出身者会会員名簿」というものが掲載されており、これがたぶん、この「獨逸学校」の卒業生によって作られた会ではないかと思われる(1980d; 226-228)。会員は医者・弁護士・大学教授などがほとんどであるが、この中には美濃部俊吉(2004b; 74-75参照)の名もみられる。

「獨逸学校」出身者会の名簿が『獨協百年』に掲載されており、しかも「旧」という字が付けられているところを見ると、この「獨逸学校」と獨逸学協会学校はかなり密接な関係にあったのではないかと推測される。また後述のように(38頁参照)、獨協大学の刊行した種々の創立記念誌には、ベルリン時代の玉井喜作と獨逸学協会学校関係の人物との様々な交流が描かれている。

以上のような経緯を考えると、おそらくこの「獨逸学校」が、玉井の通った東京府下私立獨逸学校だったのではないかと考えられるのである。そしてまたこの学校が、後に獨逸学協会学校設立の際のモデルになった、あるいは有力な母体となったのではないかとと思われる。この問題は、今後も継続して調査を行っていくことにしたい。

2. 東京大学予備門

1) 戦前のエリート・コースの形成

さて、玉井はこの「獨逸学校」で1881年2月~11月まで学んだ後、1882年(明治15)1月に東京大学予備門に入学した。これは後の旧制第一高等学校の前身で

ある。ここで東京大学成立当時のことを簡単に振り返ってみると、次のようになっている。

1877年(明治10)4月に、東京開成学校と東京医学学校の両校を併せて東京大学が成立した。当時はまだ初等・中等の普通教育が未発達であったために、このと同時に、官立東京英語学校と東京開成学校普通科を合併して東京大学予備門とした。修行年限は4年で、東京大学への進学者はすべてこの予備門を経ることになっていた。

東京大学予備門は、東京大学の法学部・理学部・文学部進学者のための独占的予備教育機関であり、医学部は、別に予科を設けて予備教育を行っていた。この医学部の予科が予備門に吸収されるのは、玉井が入学した1882年6月からである(1984a; 567-569)。『第一高等學校六十年史』の口絵には、お茶の水方面から望む東京大学予備門付近の鳥瞰写真が掲載されており、当時の雰囲気が伝わってくる(1939a; 口絵)。

次に1886年(明治19)3月の帝国大学令により、東京大学は帝国大学という名称になった。同時に同年4月の新中学校令により、東京大学予備門は東京大学から分離独立し、第一高等学校となる(1939a; 93)。さらに1894年(明治27)の高等学校令により、この第一高等学校は、いわゆる旧制の第一高等学校となった(1939a; 229)。

一方1897年(明治30)には、新たに京都帝国大学が設立されたために、それまで日本で唯一の帝国大学であった東京のそれは、東京帝国大学と改称されることになった。こうして、ナンバー・スクール(旧制高等

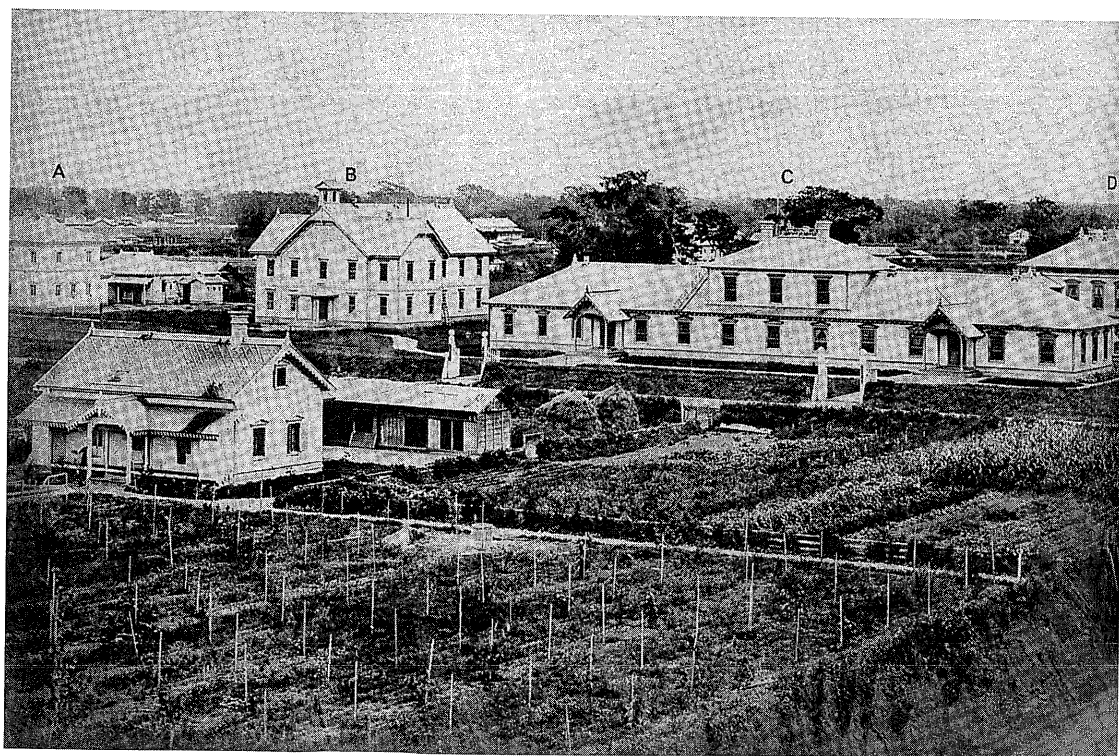


写真1: 1879年(明治12)の札幌農学校全景(北海道大学附属図書館所蔵、『写真集 北大百年 1876-1976』pp. 28-29より)。

学校)から帝国大学へという、戦前のエリート・コースができあがっていったのであった。

2) 東京大学予備門の卒業生数

さて、玉井はこのエリート・コースの入り口まで入ったものの、それを生かし切れず、結局は東京大学予備門を卒業できなかった。そして彼が入学して4年後には、予備門は第一高等学校となっている。『第一高等学校六十年史』には、彼の入学した翌年の校則があり、そこには科目の得点による昇級・降級・退学の条件が記されていて興味深い(1939a; 72-73)。また『東京帝国大学五十年史』には、東京大学予備門が設立されてから第一高等学校になるまでの、9年間の各科の卒業生数が掲載されている(1932a; 866)。これを見ると、9年間の合計数は、法科志望者110人、文科志望者108人、理科志望者178人、医科志望者94人となっている。富国強兵・殖産興業の時代なので、理科志望者は他科よりも多いが、それ以外の科では卒業生は毎年十数名しかいないことがわかる。

玉井はその後、東京でドイツ語を中心とした速成学館という私塾を経営していたのだが、1888年(明治21)の春に、札幌農学校ドイツ語教師という就職口の話が舞い込んで来た。そしてそれに応じることになり、ここに彼の修学時代は終わりを告げた。

II. 札幌農学校

1. 明治時代の札幌

1) 北海道大学の歴史

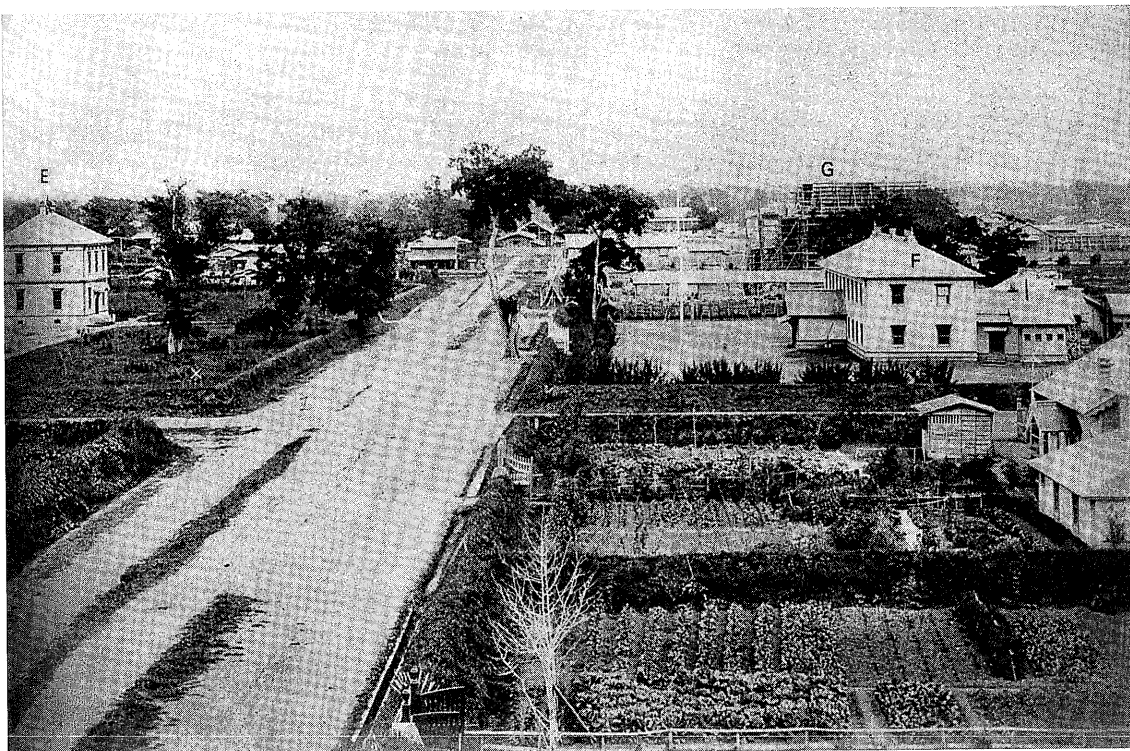
玉井喜作が札幌に住んだのは、1888年(明治21)6月から1892年(明治25)の初秋頃までであり、彼が22歳から26歳までの間であった。札幌農学校には、1888年6月23日の雇用開始から、1891年3月31日の同校による辞表受理まで、約3年間在籍したことになる。彼の札幌時代のことをもう少し詳しく知りたいと思い、筆者は2005年の夏に北海道大学を訪ね、同大学図書館で種々の文献にも目を通して見た。それにより、札幌農学校時代の玉井の姿が、以前よりも具体的に見えてくるようになった。

北海道大学の歴史に関しては、創立80年、100年、125年にそれぞれ通史・写真集などが刊行されている(1965a、1976a、1980a、1981a-b、1982c、2001a、h、2003b、f)。それらによれば、札幌農学校以降の歴史は次のようになっている。札幌農学校(1876-1907、明治9-明治40)、東北帝国大学農科大学(1907-1918/大正7)、北海道帝国大学(1918-1947/昭和22)、北海道大学(旧制1947-1949/昭和24)、北海道大学(新制1949-)。また各時期の主要な写真は、北海道大学附属図書館のサイト「北海道大学沿革写真一覧」⁷⁾で見ることができる。

2) 札幌農学校と北海道大学の位置関係

明治時代の札幌を視覚的に理解するには、当時の地図(1977a、1978b)と写真(1982a)が役立つ。特に札幌農学校に関しては、創立100年と125年の折に出版された写真集が、玉井のいた当時の雰囲気をよく伝えている(1976a; 21-43、2001h; 3-7)。

さて、札幌と小樽の間に鉄道が開通したのは1880年(明治13)であった(1953a; 504-506)。従って玉井が



A北講堂、B演武場、C寄宿舍、D復習講堂、E化学講堂、F創成学校、G豊平館(建設中)。中央の道路は北1条通り。

札幌に来た時には、すでにその路線は開通していた。現在の北海道大学はJR札幌駅の北西（北八条キャンパス）に位置しているが、その前身である草創期の札幌農学校は同駅の南東（北一条キャンパス）にあった。後者は現在の時計台のある位置であり、今では札幌市街の一番中心部分となっている。

26—27頁の写真1は、創立間もない1879年（明治12）の札幌農学校であり、Bの演武場がいわゆる時計台の建物である。これはその後写真中央から少し右よりの×印の場所（Eの化学講堂の右下、同校敷地の角）に移築された。これが現在の時計台（右の写真2）の位置である。この写真1には、同校の南隣に、建設中の豊平館（G）も写っている。この建物は、当初北海道開拓使の迎賓館として、後に洋風ホテルとして使用された（30頁の写真6、及び39—40頁参照）。

この札幌農学校が現在の北海道大学の位置に移転したのは、1903年（明治36）であった。従って玉井が勤務していた当時の札幌農学校は、今の時計台の所にあったことがわかる。同校の北八条キャンパスへの移転は、当初の位置が市街地化し、敷地も狭隘になったためである。この時、時計台のある建物の演武場は札幌区の所有となった。そして3年後の1906年に、街区の再編に伴って、元の場所から約130メートル南寄りの現在の位置に移築されたのである。

3) 玉井喜作赴任当時の札幌農学校

クラーク, W.S. が「Boys, be ambitious!」と言って北海道を去っていったのは1877年（明治10）であったが、玉井の赴任はその11年後の1888年であった。その翌年の札幌の町の全景が、28—29頁の写真3である。これは、1889年（明治22）新築の北海道庁屋上から撮影されたものである。この写真の左半分の中央部分に札幌農学校が写っている。それを間近から撮影したものが、29頁の写真4である。これも1889年頃の撮影な

ので、これがまさに玉井喜作が勤務していた当時の札幌農学校の姿である。

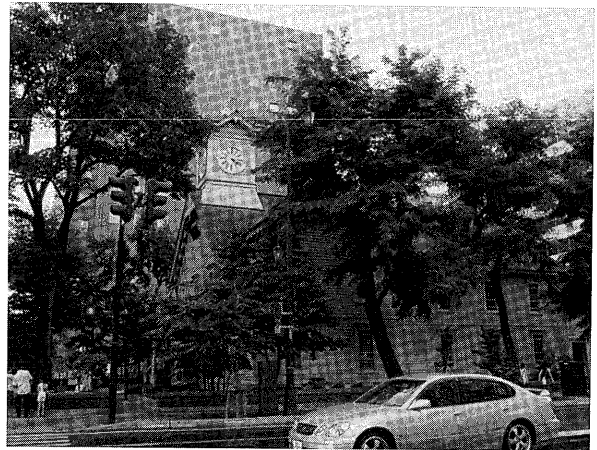


写真2；現在の札幌市の時計台

彼の住居は南二条西三丁目18番地にあったのだが、そこは時計台から南の方向に歩いて5～6分の所である。29頁の写真5の左半分が、今のその区画の姿である。現在札幌市郊外の北海道開拓の村に行くと、札幌農学校の寮（恵迪寮）が移築されているが、これは北八条キャンパスに移転後の1905年に建築されたものである。また豊平館は、市内南部の中島公園に移築されており、30頁の写真6がそれである。このような移築された歴史的建築物は、当時の雰囲気をもそのまま伝えており、当該の時代に関心のあるものにとってはまことに貴重なものと言える。

2. 札幌農学校の玉井喜作

1) 『札幌農学校』と『時計台の鐘』

クラーク, W.S. と札幌農学校については、数多くの著作があるが（1979c、1986c、1991a, d、1992aなど）、

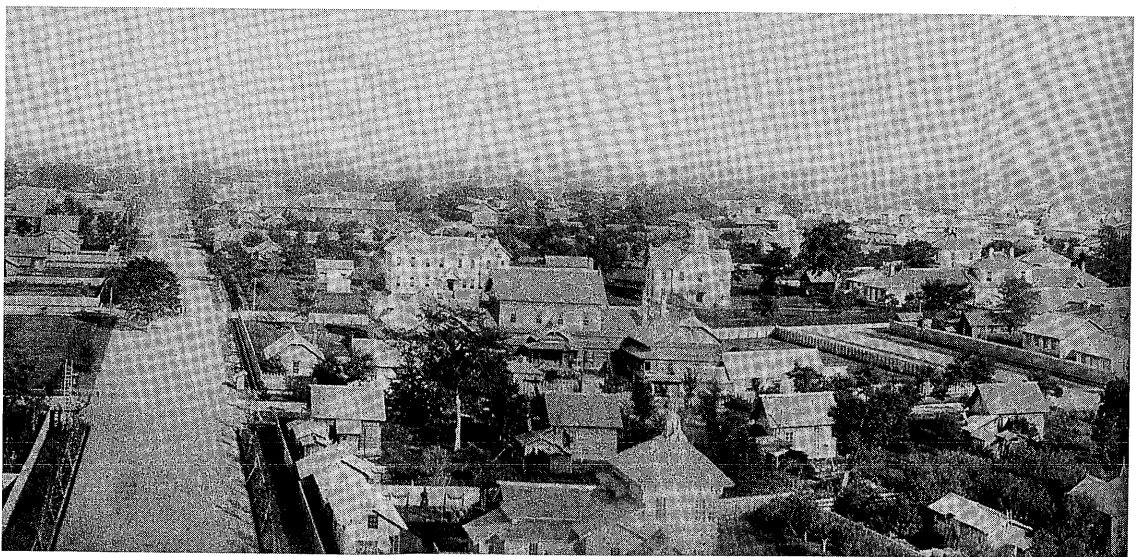


写真3；1889年（明治22）の札幌市街（北海道大学附属図書館所蔵、『写真集 北大百年 1876-1976』pp.70-71より）。

玉井との関係について言えば、1898（明治31）に刊行された『札幌農学校』（1898e）と、北海道帝国大学の総長を務めた高岡熊雄（在任1933-1937、昭和7-昭和12）の『時計台の鐘』（1956a）が興味深い。前者『札幌農学校』は、新任教授新渡戸稲造指導のもとに、当時の札幌農学校の学生が作成したものである。玉井在任当時の同校の雰囲気をよく伝えている。

また後者『時計台の鐘』は、農政学・農業経済学者高岡熊雄（1871-1961）²⁾の回想録を中心にして編まれた著作である。高岡と玉井には2つの接点があった。一つは高岡の札幌農学校予科学生時代の。今一つは高岡のベルリン留学時代（本稿36-37頁参照）である。高岡は島根県津和野で生まれ、1887年（明治20）から1895年（明治28）までの8年間（予科4年、本科4年）を札幌農学校の学生として過ごしている。従って彼がちょうど予科の時代に、玉井は同校でドイツ語を教えていたという関係になる（1956a；46-53）。

2）玉井喜作の身分・時間割・給与・営農の背景

①身分は非常勤講師

今回の調査で初めてわかったことであるが、玉井は札幌農学校の常勤教官ではなく、今日風に言えば、いわゆる非常勤講師であった。『北大百年史 通説』に、「札幌農学校の教官（1883-1907）」（1982c；156-161）と「札幌農学校の雇教員・嘱託講師（1887-1907）」（1982c；162-164）という一覧表があり、前者が常勤教官、後者が非常勤講師である。そして玉井は後者に掲載されており、在任期間は「1888年9月～？」（1982c；162）となっている。前者には宮部金吾、佐藤昌介、新渡戸稲造、大島金太郎、松村松年、高岡熊雄、岡崎文吉などが掲載されており、その中の何人かは、ベルリンの玉井家の『寄せ書き』（1986a）の常連となっている。

『北大百年史 通説』によれば、「組織の拡大に伴い1887年（明治20）以後、農学校は少なからぬ人数の嘱

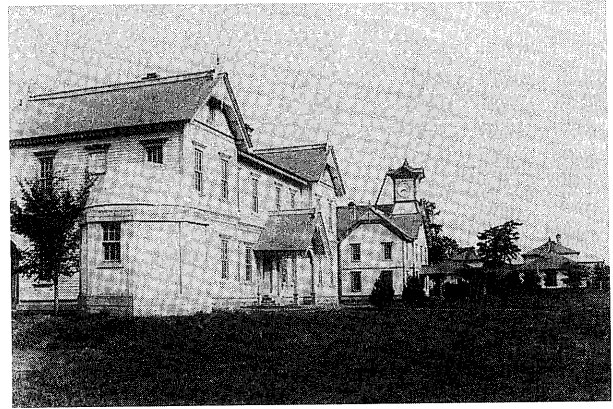


写真4；1889年（明治22頃）の札幌農学校校舎
（北海道大学附属図書館所蔵、『北大百年史 通説』口絵より）

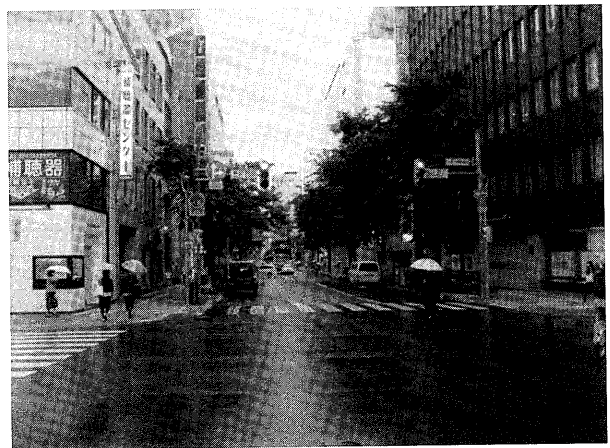
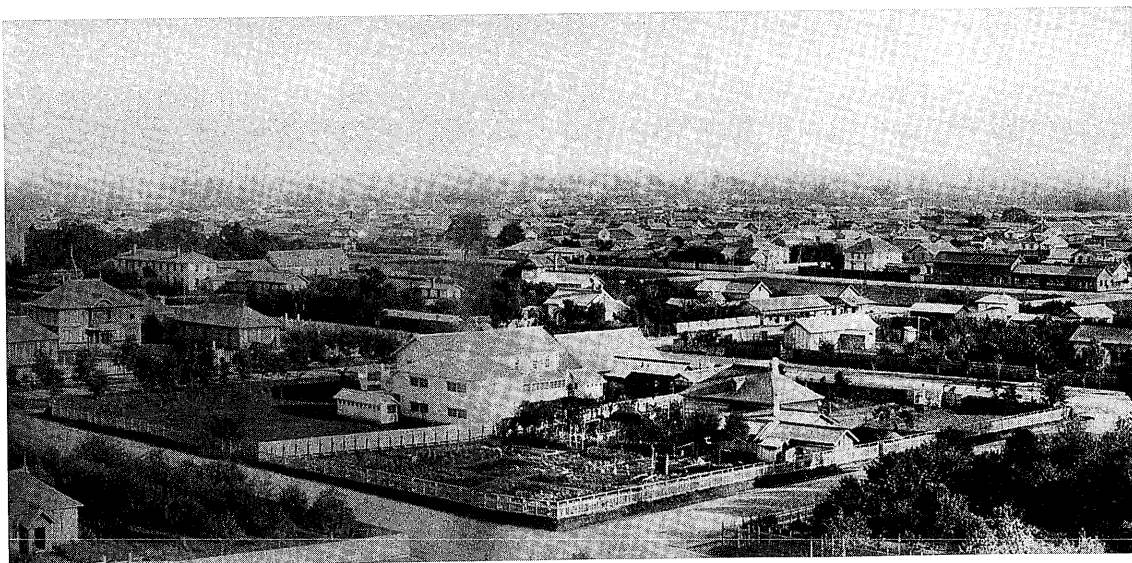


写真5；玉井喜作の住居付近の現在の様子

託教員や雇教員を採用し、授業を分担させるようになった」（1982c；96）ということであった。また『北大百二十五年史 通説編』には、札幌農学校では1880年代後半頃よりドイツ農学に対する関心が高まり、1888年8月には「独逸学研究会が設立され、9月からは



左端の道路は北3条通り。その右手、28頁の写真中央部に札幌農学校の北講堂、時計台、寄宿舎が並んでいる。

本科でドイツ語の授業も開始された。翌89年1月には予備科の後期時間割にもドイツ語が登場している」(2003f; 42)と記されている。この開始されたドイツ語の教官が玉井喜作であった。従って当時予科の学生であった高岡も、玉井からドイツ語を習ったに違いない。

おそらくドイツ農学などへの関心の高まりとともに、札幌農学校から(東京)帝国大学にドイツ語講師依頼の要請が届き、そこで玉井が推薦されたのであろう。しかし行政的観点から見れば、札幌農学校としても、東京大学予備門に入学しただけの学歴で、ドイツ語の学問的業績が全くない22歳の青年を、いかに明治前半の時代とはいえ常勤教官に採用することはできなかったであろう。確かに教える内容に関しては、常勤・非常勤の差は無いわけであるが。また一方で、当時すべてがドイツを目ざそうとしていた時代に、東京大学予備門・(東京)帝国大学経由で本格的にドイツ語を学んだものは、ベルリンをめざすことはあっても、開拓が始まって間もない札幌に行くことはなかったであろう。

②時間割・給与

ところで『北大百年史 札幌農学校史料(二)』には、玉井のいた当時の授業時間割表が掲載されている。これには1888年と1889年のドイツ語の時間が、玉井の名前入りで記されていて興味深い(1981b; 107-110、115-118、157-160)。ついでながら、1888年の玉井の給与は年俸360円であった。『北大百年史 通説』には、クラーク、W.S.の年俸7200円(雇用期間1876年5月20日-1877年5月19日)を筆頭として、お雇い外国人の破格の年俸が列記されている(1982c; 58-59)。1894(明治27)年に国家公務員(高等文官試験に合格した高等官)の年俸が600円(1981c; 159)、1898年(明治31)の銀行員の年俸が420円(1982e; 69)という時代であった。

③営農の背景

なお『北大百二十五年史 通説編』によれば、札幌農学校は学校経営を経済的に安定させるために、農地を開墾し、そこから得られる利益を学校の収入にしようとして計画していたようである。そして1887年以降、北海道庁などから2,033,976坪(約6,712,120㎡; 東京ドーム144個分の広さ)の土地の移管や交付を受けている。さらに1889年には荒無地1,100,000坪(約3,630,000㎡; 東京ドーム78個分の広さ)の仮使用も許可されている。また同校は、玉井が赴任した2年後の1890年3月31日付で、合計257,062坪の土地を北海道庁経由で札幌農学校同窓会に払い下げている(2003f; 43-44)。

玉井は赴任後数年で札幌農学校に辞表を提出し、土地を購入して農業を開始した(1989c; 57-62)。その背景には、当時の同校におけるこのような巨大な土地取

引の動きがあったことも影響したのであろうか。

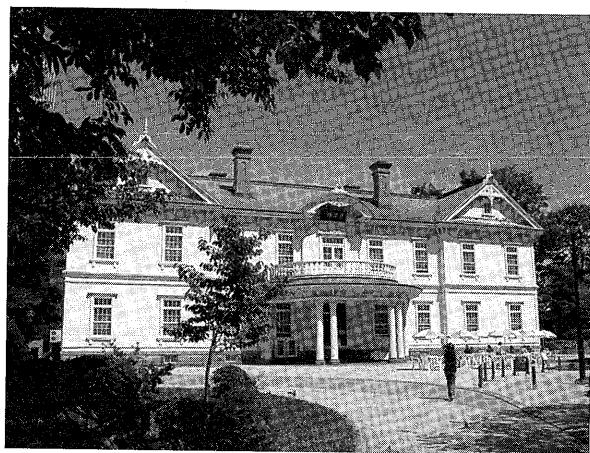


写真6; 中島公園に移築された豊平館

札幌時代の最後に、一つ付け加えておきたい。筆者は音楽学が専門なので、玉井喜作が札幌にいた当時を中心とした、明治時代のこの街の音楽状況にも関心がある。これに関しては『札幌市史 文化社会篇』(1958b; 426-450)にもその一端が記されているが、何と言っても前川公美夫『北海道音楽史』(1994c、2001²; 30-121)が詳細な情報を提供している。

Ⅲ. シベリア横断

1. 『西比利亜征槎紀行』と『シベリア隊商紀行』

さて、玉井喜作は札幌での営農の失敗の後、次は単身シベリアを横断してベルリンに行った。日本出発は1892年(明治25)11月17日(山口県下関港)、ベルリン到着は1894年(明治27)2月26日。札幌を出てから約1年4ヶ月余り、2万キロの旅であった。

中でもイルクーツクトムスク間の1800Kmは、真冬の厳寒の中、一番過酷な旅程となった。玉井はベルリン到着の4年後に、この体験をドイツ語で綴り出版している。それが『Karawanen-Reise in Sibirien』(1898a)であり、これには『西比利亜征槎紀行』という日本語の題が並記されている。37頁の写真12がその表紙である。この著作が『シベリア隊商紀行』(1963b)として日本語に翻訳されたのは、原著出版の65年後であった。31頁の写真7がそれである。以下本稿では、『西比利亜征槎紀行』はドイツ語の原著、『シベリア隊商紀行』は邦訳を示すこととする。

玉井がベルリンで『Ost=Asien』を刊行したことを本格的に紹介したのは、湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(1989c)が最初であった。この本は1989年(平成1年)に出版されている。それまでの玉井は、シベリアを単身横断した冒険家という観点から評価されることがほとんどであった。従って昭和の終わりまで、つまり1980年代末までの玉井に関する文献は、多かれ

少なかれ、このシベリア横断を中心テーマとして取り上げている。ここでは次に、一部ベルリン時代のこととも含まれるが、主に玉井のシベリア横断に言及した文献を時代順に振り返ってみたい。

2. 玉井喜作のシベリア横断への言及

1) 明治・大正

まず、1901年（明治34）から1907年にかけて世界一周無銭旅行をした中村直吉（1865-1932）という人物がいる。その時期は、ちょうど玉井がベルリンで『Ost=Asien』を刊行していた時代であった。彼は全5巻の旅行記録を残しているが、第1巻には当時の大韓（現在の韓国・朝鮮）で三増領事を訪問したことが書かれている。この三増は、玉井がシベリアからベルリンに着いた時に、ベルリン公使館に勤務していた人物である。その記録には、三増が中村に玉井のことを話したと記されている（1908b；108）。また第4巻には、ベルリンに向かう旅の途中で中村が自分の手荷物を失ったこと（1910d；284-289）、そして第5巻には、玉井が鉄道に掛け合ってそれを見つけ出してくれたという話が書かれている（1912a；1-6）。この80年ほど後に、青木澄夫は、中村のこのベルリンでの体験を『アフリカに渡った日本人』に記している（1993d；105-106）。

次に大正時代入ると、ロシア通のジャーナリストであった大庭柯公（1872-1924）が、『露国及び露人研究』の中で、玉井のウラジオストック時代における「列車妨害事件」のことを書いている（1925a；214）。³⁾

2) 昭和（戦前）

昭和に入り第二次世界大戦時には、日独伊三国軍事同盟（1940）が結ばれた関係で、玉井は明治時代にシベリアを横断し、ベルリンで日独交流に尽くした人物として注目されている（1942a-d、1944b）。このような形で取り上げられることは、玉井自身にとっては不本意なことであったと思われる。

そのような中で、太田為治「鉄道開通前のシベリヤの交通」（1944a）は興味深い。これは、玉井のドイツ語による『西比利亜征槎紀行』の初めての翻訳である。ただし全訳ではなく、冒頭の「序」と「シベリアの交通制度」の部分の抜粋抄訳である。ここに描かれているシベリアの交通事情は、確かに19世紀末のものである。しかし1944年1月という発表時期を考えると、軍部の側にとっては、これも戦争のための重要な資料となったかもしれない。

3) 昭和（戦後）；『シベリア隊商紀行』の出版

戦後の混乱が終わった後、しばらくして岩倉規夫「西比利亜征槎紀行のこと」（1961a）が現れた。しかしこれは雑誌に発表されたエッセイであったため、気づく人も少なかったと思われる。筆者もこの文章の存在を初めて知ったのは、その発表から28年後の『キサク・タマイの冒険』においてであった（1989c；257）。

翌1962年には、玉井喜作の四女喜代子の娘たちが、『西比利亜征槎紀行』の翻訳を新聞で依頼する（1962a）。この本が、原著の出版から65年後に翻訳されることになったきっかけは、実はこの小さな新聞記事であった。当時宇部工業短期大学の講師であった小林健祐は、これを読み、翻訳を引き受けた。そしてまず翌年2月に、「シベリア隊商紀行—七十年前・一日本人の冒険記—」（1963a）と題して、抄訳を交えながらこの著作の概要を解説する。そして同年10月に『シベリア隊商紀行』（1963b）としてその全体を翻訳出版した。こうして玉井のシベリア横断が日本語で読めるようになった。1963cと1963dは、玉井の四女喜代子と、翻訳を依頼したその娘たちの喜びを伝えている。



写真7：『シベリア隊商紀行』

その後、玉井のシベリア横断に言及したものが少しずつ出てくるようになる。長澤和俊は『世界探検史』（1969a）の後、『日本人の冒険と探検』を書き、その中で玉井を紹介した（1973a；187-194）。また彼は最近の『別冊太陽 日本の探検家たち』の中でも玉井に言及している（2003d；7,49）。『朝日新聞百年の記事にみる2 探検と冒険』には、年表に玉井が載っている（1979a；311）。また北上次郎（目黒孝二）も、1986年以降様々な形で玉井に言及している（1986f、1988c、1989p、1989s、1993b、1996g、1998d）。

3. 大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』

1) 『シベリア漂流』の成立と玉井喜作の日記

しかし専門家の立場から、玉井のシベリア横断を本格的に日本に紹介したのは大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』（1998e。書評・紹介は1999d-e、1999g-h、2000a）が最初であった。この著作は、当初「ユーラシア・アドベンチャー（1）～（4）」（1996b,d-e,h）としてその基本的骨格が発表され、それをもとに書き下ろされたものである。その具体的経緯に関しては、大島幹雄「明治にシベリアを横断した冒険者」（1996f）に詳しい。

玉井喜作がイルクーツクで窮乏生活を送っていた時代や、シベリア横断中最も難関であった旅程、イルクーツクートムスク間の日記には、『シベリア隊商紀行』のみでは読み取ることのできないような過酷な旅の一面を垣間見ることができると思われる。しかし彼のシベリア横断中の日記は、ロシア語・ドイツ語・日本語が混在し、しかも移動中に書いたこともあって大変読みにくい。ところが、私たちは今日それを大島幹雄《デラシネ通信》において容易に読むことができるのである。

すなわち、「玉井喜作 イルクーツク艱難日記(1893年8月16日～1893年9月14日)」⁴⁾と「玉井喜作 イルクーツクートムスクの旅 (1893年12月7日～1894年1月5日)」⁵⁾がそれである。この日記をこのように丹念に読み解き、その全行程を詳細克明に再現することは、大島幹雄でなければできないことであった。というのも、彼はロシア地域の漂流民に詳しく、レザーノフ、N. の『日本滞在日記』(2000b)の翻訳もしているほどにロシア語に堪能だからである。なおこの《デラシネ通信》では、他にも「玉井喜作研究への誘い」⁶⁾や、「玉井喜作と若宮丸漂流民の接点をさぐる」⁷⁾や、大塚仁子「玉井喜作と「東亜」」⁸⁾など、玉井に関する多くの情報を得ることができる。

2) 若宮丸漂流民と玉井喜作

①年表：若宮丸漂流民と『西比利亜征槎紀行』

実は、大島幹雄を玉井喜作研究に向かわせた大きな要因があった。それは若宮丸漂流民の事件である。ここで、あらかじめその経緯を年表にまとめてみると次のようになる。

- 1793年 若宮丸、宮城県石巻港を出港後遭難漂流
- 1806年 若宮丸漂流民13年ぶりに帰郷
- 1807年 『環海異聞』仙台藩による漂流民の記録
- 1809年 『世界周航の旅』ロシア側の記録
- 1892年 11月17日玉井喜作シベリア横断に出発
- 1893年 8～9月玉井喜作イルクーツク艱難日記
12月7日～1894年1月5日玉井喜作；イルクーツクートムスクの旅
- 1894年 2月26日玉井喜作ベルリン着
4月『寛政年間仙台漂客世界周航実記』
10月31日 土屋遼三郎に旅行記送付依頼
- 1895年 『Globus』に若宮丸の件発表(序、1-4)
- 1896年 『Globus』に若宮丸の件発表(5)
- 1898年 『西比利亜征槎紀行』出版
- 1899年 小宮美保松、司法制度研究のため洋行
- 1900年 夏頃；小宮美保松、吉郎次の墓発見

②『西比利亜征槎紀行』の付録

玉井は『西比利亜征槎紀行』に、付録として「百年前、日本人数名よるシベリア経由の世界紀行」という文章を付けている(1898a；127-163、1963b；266-287)。これは1793年(寛政5)に、宮城県石巻港から若

宮丸に乗って出港した16人の乗組員が、その後遭難漂流した話である。その中の4人は、数奇な運命をたどって文字通り世界一周を果たし、13年後の1806年(文化3)に故郷の石巻に戻ってきた。この漂流民たちの概要に関しては、『世界一周した漂流民』(2003e)に詳しい。玉井がイルクーツクに滞在していたちょうど百年前に、同じくイルクーツクからペテルブルクの方に向かつて旅をした日本人の一行であるだけに、玉井はこのことに非常に強い関心を持ったのであろう。そこで彼は、この話を『西比利亜征槎紀行』の付録として付けたようである。

③『Globus』へ連載された若宮丸漂流民

実は玉井は、この話をその付録に載せる前に、一度それを『Globus； Illustrierte Zeitschrift für Länder- und Völkercunde. Vereinigt mit der Zeitschrift “Das Ausland”』(『地球；地理学と民族学のためのグラフ雑誌 雑誌「外国」と提携』。以下『Globus』と略記。)という雑誌にドイツ語で発表している(1895a-b, 1896a)。これは玉井がベルリン大学に在籍し、法学を学んでいた時期である。

すなわち、1895aが『西比利亜征槎紀行』の付録「百年前、日本人数名よるシベリア経由の世界紀行」の序と1～3の部分。1895bが「同」4の部分、1896aが「同」5の部分に対応している。一部語句の変更などもあるが、ほぼ『西比利亜征槎紀行』と同一の文章である。

④大島幹雄『魯西亜(ロシア)から来た日本人』

一方、大島幹雄『魯西亜(ロシア)から来た日本人—漂流民善六物語—』(1996i)は、その若宮丸漂流民を扱った著作であり、特にその内の、ロシアに帰化した善六という人物に焦点を合わせたものである。この漂流民一行の中に吉郎次という老人がおり、彼はイルクーツクで死去しその地に葬られた。そして、それから約100年余りの吉郎次の墓の発見には、玉井喜作とドイツ人フーゴ・ムルケと大審院判事小宮美保松の3人が関係しているということがわかった。このことが、大島幹雄を玉井喜作研究に向かわせる大きな要因の一つとなったようである。

その経緯は『魯西亜(ロシア)から来た日本人—漂流民善六物語—』(1996i；58-61, 73-76)、『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』(1998e；88-95)、『世界一周した漂流民』(2003e；32-34, 58)に詳しいが、簡単に要約すると、次のようになる。ムルケは数十年イルクーツクに在住する時計商であり、玉井のイルクーツク時代にも面識があり、また両者はその後ベルリンでも会っている。小宮美保松は、司法制度研究のため1899年(明治32)に洋行し、ベルリンで玉井に会っている。小宮はその後シベリア経由で帰国する1900年の夏に、イルクーツクに立ち寄り、ムルケの案内で吉郎次の墓を発見した。従って玉井がベルリンで小宮に、イルクー

ツクの吉郎次の墓と、同地に在住するムルケのことを話したのであろうということである。

⑤玉井喜作はいつ若宮丸漂流民のことを知ったか

問題は、玉井がこの若宮丸漂流民のことを知ったのが、イルクーツク滞在時かベルリン到着後かということである。大島幹雄は既述のサイト「玉井喜作と若宮丸漂流民の接点をさぐる」の第一回「シベリア隊商紀行と『世界周航実記』」⁹⁾において、現在のところベルリン到着後と考えるのが妥当ではないかと述べている。その説を要約すると次のようになる。

つまり、玉井はベルリン到着（1894年2月26日）後、自分のシベリア横断を書物にするための参考文献として、日本の友人土屋遼三郎にいくつかの探検記の送付を依頼（1894年10月31日）した。その中に若宮丸漂流民の記録である『寛政年間仙台漂客世界周航実記』（1894年4月発行、博文館）があった。読んでみると、これは自分が旅行したルートのちょうど百年前の記録であった。そこで、その件に関するロシア側の記録『ナジェジダ号とネバ号による世界周航の旅』（1809年ペテルブルクで出版）を併せ読んで、若宮丸漂流民の事をまとめたのであろうという説である。

この説は、その後の玉井の行動と時間的に符合しており、無理がない。すなわち、玉井は翌1895年から1896年にかけて、まずそれを『Globus』に発表し、さらに1898年の『西比利亞征伐紀行』の付録にそれを付けているからである。おそらく、1900年夏頃以降の『Ost=Asien』の「雑報」欄には、小宮が吉郎次の墓を発見したこと、あるいはそれに関する日本での新聞報道の記述があると思われる。それを読めば、玉井が若宮丸漂流民のことをいつ知ったかということもわかるかもしれない。この件に関しては、筆者も今後調査を続けていきたいと考えている。

因みに、この漂流民に関する日本側の記録の最初は1807年の『環海異聞』（1989v）であり、これは帰国した漂流民に対する仙台藩の取り調べ記録である。それが明治になって出版されたものが、上記の『寛政年間仙台漂客世界周航実記』であった。なお『環海異聞』の中には、漂流民が接した1800年頃のロシアの楽器が紹介されていて興味深い（1989v；口絵17, 123-124）。

3) 大島幹雄の魅力

さて、大島幹雄「徒歩でシベリア横断—玉井喜作記念館・光」（2005a；14-15）は最近発表されたものであるが、直接玉井に関係しないものでも、彼の著作は筆者にとって興味深いものばかりである。それらについてもここで少し紹介しておきたい。

実は『Ost=Asien』には、当時日本から欧米に出かけた曲芸師一座、太神楽の一行、芸妓の一団、芝居の一座などの紹介も含まれている（2004b；47-48, 68, 70-71）。彼の『海を渡ったサーカス芸人—コスモポリタン沢田豊の生涯—』（1993e；88-101）は、それらの記

事の読解にも貴重な情報を提供している。

また以前より筆者は、『Ost=Asien』が刊行された19世紀末から20世紀初頭のベルリンを中心とした芸術文化に強い関心を懐いている。そして同時代のパリ・ミュンヘン・ウィーンなどの新しい芸術運動と、ベルリンのそれとの照応関係にも興味を持っている。このような筆者にとって、ロシア・アヴァンギャルドを扱った『サーカスと革命—道化師ラザレンコの生涯—』（1990a）は、以前から気になりながら知の空白部分であった場所に良い刺激を与えてくれるものとなった。

さらに『虚業成れり—「呼び屋」神彰の生涯』（2004a）は、音楽学を専門とする筆者には、戦後日本の音楽史の舞台裏を知る上で強く印象に残った著作であった。若宮丸漂流民にせよ、玉井喜作にせよ、沢田豊にせよ、大島幹雄の著作には、歴史の片隅に埋もれた人間を丁寧に掘り起こし、それぞれの人物の存在理由 *raison d'être* に光をあてていこうとする暖かい筆致が感じられる。

IV. ベルリン時代

1. ベルリン大学在籍と『Globus』への寄稿

1) ベルリン大学

玉井喜作のベルリン時代は、約12年半であった。既述のように、彼はシベリア横断の後、1894年（明治27）2月26日、28歳の時にベルリンに到着した。そして1906年（明治39）9月25日に同地で亡くなっている。享年40歳という若さであった（1906a-e）。

ベルリン到着後、当初3ヶ月ばかりはハンブルクの商社で働いていたようである。その後ベルリンに戻り、まず新聞に記事を書いて生活したということであるが、残念ながら筆者はまだそれらの記事を見ていない。次に、1895年（明治28）の夏学期から1896年の夏学期までの1年半（3学期間）は、ベルリン大学に在籍し、法律学を学んでいた（1997b；60）。



写真8；ベルリン大学

2) 『Globus』

ベルリン時代の玉井の足跡がはっきりとたどれるのは、この時期からである。彼は既述の『Globus』へ、1895年から1896年にかけて合計8回投稿している(1895a-b, 1896a-f)。この雑誌はボン大学の図書館にあった。所蔵館はアデナウアー通りの中央図書館ではなく、メッケンハイマー通りの地理学研究所の図書館であった。右の写真9がそれである。雑誌本体は、製本されてハードカバーの付いた大判(A4)のものであった。全体の印象としては、文字が8割、イラスト・写真が2割という感じのものである。現在のグラフ雑誌とはかなり印象が異なる。19世紀後半以降にあちこちで出版された、イラスト入りの新聞・雑誌とほぼ同じ体裁であった。

この時期、玉井はベルリン大学に通いながら、この雑誌に既述の若宮丸のことや(1895a-b, 1896a)、27,000人が亡くなった三陸の大津波のことや(1896c)、日本の人類学の学会誌の抄訳や(1896d)、日本の動物寓話(1896f)などを紹介していた。わずか8回の投稿であるが、その内容を見てみると、後に自分で発行することになる『Ost=Asien』の雰囲気とよく似ている。一見雑多な記事の寄せ集めのようなものであるが、日本を中心としたアジア地域の情報を何とかドイツ、そしてヨーロッパに伝えようとしていることが伺われる。その意味で、この『Globus』への8回の投稿は、『Ost=Asien』の下準備になっていたとも言えるであろう。

2. 『西比利亜征伐紀行』と『Ost=Asien』の刊行

そして1898年(明治31)初頭に、ベルリンのカルル・ジーギスメント社から既述の『西比利亜征伐紀行』(1898a)を出版した。日清戦争と日露戦争の中間の時期に出版されたこの著作は、当時の緊迫した極東情勢により、欧米の関心がアジアに向けられていたことも手伝ったのか、書評も書かれる程度に関心を持たれたようである。その内の一つ、ドイツの日刊紙に掲載された書評は、湯郷将和『キサク・タマイの冒険』に紹介されている(1898c; 168-169)。

さて、この著作の印税を手にした玉井は、それを基金として、同年春からいよいよ『Ost=Asien』(1898b)を刊行し始めた。創刊の辞(1898c-d)については、昨年の拙稿で紹介した通りである(2005b; 27-29)。筆者はこの数年、この雑誌の基本的なデータを4回に分けて紹介している。すなわち全139号の目次の翻訳(2002b)、及びそれに対応する元の独語版の覆刻(2004c)、さらに目次に登場する外国人(2003a)と日本人(2004b)の人名注解である。

人名注解には、それぞれの人物が『Ost=Asien』の何号に寄稿したかのデータを付記している。従って目次と併用すれば、各人がこの雑誌の何年何号にどのような論文・エッセイを書いたかがすべてわかるように

なっている。従ってこの4編の拙稿を利用することによって、『Ost=Asien』の全貌がつかめるであろう。また『Ost=Asien』の後継誌である『Japan und China』(老川茂信刊行)の刊行状況一覧表は、筆者のホームページの「玉井喜作記念館」¹⁰⁾に掲載している。

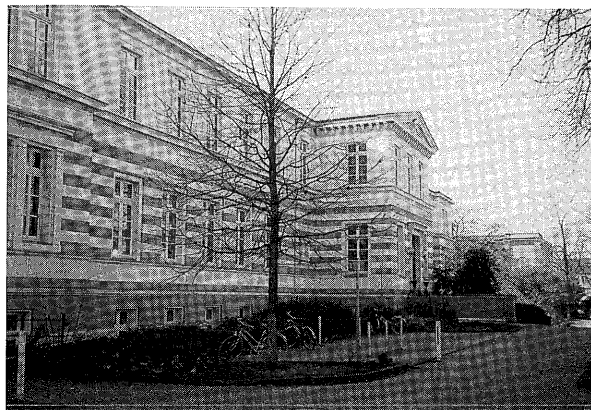


写真9:『Globus』を所蔵していたボン大学地理学研究所

それでは次節においては、『Ost=Asien』に頻繁に投稿しているアレクサンダー・シーボルトと玉井喜作の関係を見ていくことにしたい。

3. シーボルト, A. と玉井喜作

1) シーボルト, A. の日記

①ヴェラ・シュミットによる日記の公刊

アレクサンダー・シーボルト(1846-1911)とは、幕末のシーボルト事件のシーボルト, P.F.B. von (1796-1866)の長男である。彼は、『Ost=Asien』に数多くの論文・エッセイを寄稿しており、筆者は彼が『Ost=Asien』の論説委員の役割をしていたのではないかと考えている。しかし筆者の専門は音楽学であるために、国際政治学、歴史学関係の内容が中心となるシーボルト, A. の諸論文を、当時の歴史的状況の中において読み解いていくことは任ではない。ここでは『Ost=Asien』に関係する範囲内で、いくつかの基本的な文献を紹介しておくに留めたい。

1999年に、ヴェラ・シュミット編集による全3巻のシーボルト, A. の日記が公刊された(1999a-c)。これはB5版で各巻平均800頁あまりの大部なものであるが、第1巻(A)が1866-1892年の日記、第2巻(B)が1893-1911年の日記、第3巻(C)が注と索引という構成になっている。日記はドイツ語で書かれている日もあれば、英語の日もある。

シーボルト, A. が長年の日本勤務を終えてベルリンに居住するようになったのは、1890年代の終わり頃であった。これは、ちょうど玉井喜作が『Ost=Asien』を刊行し始めた頃である(2003a; 62-63)。従ってこの日記の中には、シーボルト, A. が玉井との出会いなどを述べた部分があるのではないかと期待して繙いたの

だが、残念ながらそのような記述は見られなかった。玉井喜作について書かれた部分は、第2巻に出てくる次の8カ所である。①1898年7月9日(土)、②1899年8月11日(金)、③1900年3月14日(水)、④1900年4月13日(金)、⑤1903年1月2日(金)、⑥1903年9月12日(土)、⑦1905年4月9日(日)、⑧1906年5月8日(火)。②のみが英語で、それ以外はドイツ語で書かれている。

②玉井喜作と老川茂信に関する記述

内容はいずれも事務的なものばかりであり、いくつか紹介すると次のようなものである。『Ost=Asien』用の論文「ロシアの政策」を玉井喜作に送った(①1999b; 921)。日露問題に関する論文を書き、玉井喜作に送った(④1999b; 990)。井上(勝之助ドイツ公使)の依頼により、『Ost=Asien』の販売について玉井喜作と話す(⑦1999b; 1193)などである。中には、編集者としての私の仕事の代金500マルクを玉井喜作から受け取り、その他の多くの勘定の支払いも受領した(⑤1999b; 1098)というものもあり、シーボルト,A.に対して支払いが滞ることもあったのかと伺わせるような記述もみられる。

注・索引の第3巻では、玉井喜作の名前は7カ所出てくるが、最初の箇所(①の日記の注)が一番詳しく、全文を紹介すると次のように記されている。「玉井喜作(1866-1906)。ジャーナリスト、著述家。1894年以降ベルリンに居住し、1898年から亡くなるまでベルリンで雑誌『Ost=Asien』を発行した。シーボルト,A.はこれに数多くの論文を書いている。ある時はシーボルト,A.の名で、ある時は筆名の鳴滝で、またある時は無署名で」(1999c; 507)。¹¹⁾

また老川茂信の名前は第3巻に1カ所だけ登場する。それは1898年10月21日(金)の日記の注である。同日の日記に、シーボルト,A.が書いた論文を『Ost=Asien』に送ったという記述があり、その注には『Ost=Asien』の概要(タイトル全体・刊行時期・主筆名)が記され、その中で玉井の後継者として老川が紹介されている(1999c; 511)。

いずれにせよ、シーボルト,A.の日記の中に玉井喜作の名前が出てくるのは、1898年7月から1906年5月までであり、これはまさに玉井が『Ost=Asien』を刊行していた時期と重なっている。従って、両者には深い付き合いがあったことがわかる。

2) 玉井喜作が出版したシーボルト,A.の著作

①『欧州国際団体ニ日本ノ加入』など3冊

ケルナー,H.も紹介しているように、玉井はシーボルト,A.の著作を3冊出版している(1974a; 217-220)。いずれも、『Ost=Asien』に掲載されたシーボルト,A.の論文・エッセイをまとめて本にしたものである。すなわち、まず『ヨーロッパ国際法への日本の参入』(1900a)。これは署名入りで寄稿した同名の論文をまとめた

ものである。ドイツ語の原著には『欧州国際団体ニ日本ノ加入』という日本語のタイトルが並記されている。なおこれには、ダギャン,F.とマイエール,S.による仏訳(1900年、パリ)、及びロウ,C.による英訳(1901年、ロンドン)もすぐに出版されている。日清戦争後の世界情勢の中で、日本が注目されざるを得ない状況にあったことがわかる。

次に『東アジアの政治的視界に関する展望』(1900b)。これは、シーボルト,A.が匿名で『Ost=Asien』に寄稿した表題関係の論文19編をまとめたものである。

最後に『ジーボルト最後の日本旅行』(1903a)。これは『Ost=Asien』に、「古き日本への回想録」というタイトルで連載したものをまとめた著作である。ドイツ語の原著には『フキリップ フランツ フォン ジーボルト 最終日本紀行』という日本語のタイトルが並記されているが、このタイトルのジーボルトは、幕末のシーボルト事件の当事者であった父親の名前である。つまり、シーボルト事件のために1830年に国外追放になった父シーボルトは、29年後の1859年に、12歳の長男アレクサンダーを連れて再度来日した。これは、その旅行のことを、後年長男が記したものである。なおこの本は、戦前に一度『シーボルトの最終日本紀行』(1931a)というタイトルで邦訳が出て、現在は平凡社の東洋文庫に収められている。

②シーボルト,A.関連文献

1996年に開催された「シーボルト父子のみた日本—生誕200年記念—」(東京都江戸東京博物館、4月20日-6月30日)においては、『欧州国際団体ニ日本ノ加入』と『フキリップ フランツ フォン ジーボルト 最終日本紀行』の原著が展示されていた(1996c; 234-235, 252-253)。ヨーゼフ・クライナー編著『黄昏のトクガワ・ジャパーン—シーボルト父子のみた日本—』(1998c)には、父シーボルト、長男アレクサンダー、次男ハインリヒの3人の足跡、業績、日本への影響、彼らのコレクションなどが非常にわかりやすくまとめられている。

シーボルト,A.は長年日本政府に勤務した後、ヨーロッパに定住するようになった。彼は義和団事件(1900)や日露戦争(1904-1905)をベルリンから見て、『Ost=Asien』に様々な論文を寄稿した。ヨーロッパと日本の両方を知った上で書かれたこれらの論文は、確かにその事情故の制約や偏りもみられるかもしれない。しかしいずれにせよ、国際政治学や歴史学の研究者にとっては貴重な史料になるものと思われる。「義和団事変と欧州のアレクサンダー・シーボルト」(2001b)を書いた松村正義のような研究者が、専門家の立場から、『Ost=Asien』に掲載されたシーボルト,A.の論文を分析すれば、当時の緊迫した国際情勢がより鮮明に浮かび上がってくるのではないかとと思われる。

4. 高岡熊雄と玉井喜作

1) 玉井一家とともに

次に、既述の高岡熊雄のベルリン留学時代を振り返りながら、玉井喜作のベルリンでの生活の一齣を垣間見てみたい。高岡は1895年に札幌農学校を卒業後、母校で数年教鞭を執り、1901年(明治34)2月から1904年12月までドイツに留学している。最初の1年半はボン大学、その後1902年秋からはベルリン大学に移り、そこで2年余りを過ごした(1956a; 62-91)。

玉井家の『寄せ書き』(1986a)を見ると、高岡はこの2年余りのベルリン時代に、しばしば玉井家を訪れている。例えばベルリン到着早々の1902年9月21日には、高岡が恩師の新渡戸稲造とともに玉井家を訪ねていたことがわかる(2005b; 43)。なお、この時にもう一人署名している岡崎文吉という人物は、これまで不詳であったが、札幌農学校の助教授で物理学を教えた岡崎(在任1893-1894)ではないかと思われる(1982c; 158)。もしそうであれば、この日に集まったのはすべて札幌農学校の教官ということになる。

下の写真10は、それから約1ヶ月近く後の同年10月17日の写真である。後列左が高岡熊雄、同右(写真中央)が玉井喜作である。玉井の家は、同時に『Ost=Asien』の編集・出版事務所でもあったのだが、後年高岡はこの時代を回想して次のように記している。「彼(玉井喜作―筆者挿入―)の事務所は常に日本人の集会所となり、あたかも民間の日本領事館であり、日本公使館であった」(1956a; 90)と。

高岡がベルリンに滞在したこの2年あまりの期間は、玉井の人生においては、最も安定した幸せな時期

であったと思われる。というのも、彼が日本を出発した1892年以来、妻と2人の娘はずっと日本で暮らしていた。その家族が、1902年8月にはベルリンに到着し、10年ぶりの再会を果たしている上に、翌年の11月には四女喜代子も生まれているからである(2005b; 41-43)。確かに、1904年2月の日露戦争開始以降、明石元二郎に依頼された戦争関係の情報収集で玉井も忙しくなる(2003a; 46-47)。しかしそれでも『寄せ書き』を見ると、家族に囲まれた玉井の家を、その後も数多くの友人知人が頻繁に訪れ、東亜料理を囲んで歓談していたことがわかる。

下の写真11は、そのような時の一齣である。これは玉井の三女文子と高岡であり、1903年2月17日の日付が記入されている。高岡は「春の暖かい日曜日などに、玉井君一家と共に握り飯を携えて、郊外散策を試みたことなどは、今なお忘れることの出来ない思い出である」と回想している(1956a; 91)。

2) 『西比利亞征伐紀行』献呈

現在北海道大学附属図書館に行くと、ベルリンから玉井が署名入りで高岡に寄贈した自著『Karawanen-Reise in Sibirien』(1898a)が所蔵されている(農学部図書室書庫; 高岡文庫)。次の頁の写真12がその表紙であり、その次の写真13が献辞である。献辞には「呈高岡君 在伯林 著者 10/4 1901」と書かれており、1901年(明治34)4月10日に発送したことがわかる。この時高岡はボン大学に在籍していたので、おそらくボンに郵送したものであろう。



写真10; 高岡熊雄(後列左)と玉井喜作(写真中央)



写真11; 高岡熊雄と玉井喜作の三女文子

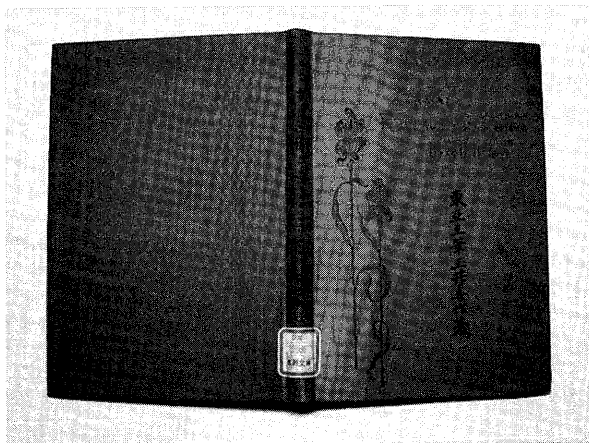


写真12: 『西比利亜征槎紀行』表紙



写真13: 『西比利亜征槎紀行』高岡熊雄への献辞

5. 日独両面から見た玉井喜作

1) ドイツから見た玉井喜作

さて、このようなベルリンでの玉井喜作一家の生活の様子や、『Ost=Asien』の事務所の変遷などの詳細に関しては、拙稿「ベルリンの玉井喜作」(2005b)で説明した。その中では『Ost=Asien』の記事から、創刊の辞(1898c-d)、玉井喜作への追悼記事(1906a)、玉井の次女韶子への追悼記事(1905a)、玉井の遺族への義捐金の報告(1908e)などを紹介している。また『Ost=Asien』創刊10周年記念の記事(1908d)も、別の拙稿でその一部を紹介した(2003a; 45)。

これらによって、ベルリン時代の玉井喜作のことはかなり明らかになってきたと思われる。この第5節では、日独双方の同時代の記録やその後の記録から、さらにそれらを補うものを取り上げていきたい。

①ベルリンの和独会

1888年(明治21)12月に、独日協会(和独会)という組織が活動を開始した(1996a; 13)。これは、ベルリン在住の日本人(留学生、公使館員など)と、親日家のドイツ人との親睦会であった。玉井は『Ost=Asien』を刊行し始めた頃から、この会の維持存続にかなりの力を注いでいたようである。この会の会報は、

当時の日独交流の様子をよく伝えている(1908c, 1910a)。特に3巻12号の「独日協会(和独会)の最初の20年間の存続における発展」(1910b)は、1888年以降の歴史をまとめたものであり、この会の動向を知る上で貴重な資料である。玉井没後の「1907年以降、(同会には一筆者挿入)再び学問的志向が目立ってきた」(1910b; 102)とあるのは、逆に、玉井がこの会においてどのような役割を演じていたのかを告げていて興味深い。

②『独日協会—1888年から1996年まで—』

そしてこの独日協会(和独会)のその後の歴史も含めて、その全体像を描いた著作が、『独日協会—1888年から1996年まで—』(1996a)である。これは全文ドイツ語の書籍であるが、日本語のタイトル『独日協会の昔と今』が並記されている。A5版全625頁の中に、同会の創設期から現代までの歴史が詳細に描かれている。しかし第二次世界大戦後を扱っているのは、441頁以降であり、どちらかと言えば440頁までの戦前の歴史に重点が置かれている。そしてこの部分は、アンネッテ・ハックが一人で書いている。

特に第1章「独日協会、和独会(1888-1912)」(1996a; 11-66)は、玉井喜作がベルリンで過ごした時期を中心にその前後の時代を扱っている。ハック自身、同時代の直接的な史料として、初期の独日協会の会報(1908c, 1910a-b)や『Ost=Asien』を利用したと記している(1996a; 3)。とりわけこの章の3節から6節(1996a; 21-66)までは、『Ost=Asien』からの引用が多い。そして玉井喜作に関しても、シベリア横断以降のベルリンでの多面的な活動を詳細に伝えている。すなわち、様々な新聞への寄稿、『西比利亜征槎紀行』の出版、『Ost=Asien』の刊行、シーボルト、A.の著作の出版、絵葉書の作成、日露戦争や日本の飢饉のさいの募金活動などである(1996a; 27-29)。

③『19世紀と20世紀におけるベルリン—東京』

もう少し広い観点から、19世紀後半以降のドイツと日本の関係を様々な角度から描いた著作が、『19世紀と20世紀におけるベルリン—東京』(1997a)である。これは、1860年代から今日までのベルリンと東京の関係史を、日独の各分野の専門家が分担執筆した論文集である。扱われている内容は広く、政治・経済・教育・音楽・演劇・文学・美術など多岐にわたっている。この著作ではハーシュ、G.「ベルリン独日協会の前身としての和独会(1888-1912)」(1997a; 79-82)とゲールケ、M.=L.「19世紀から20世紀への変り目」(1997a; 91-111)の部分に、玉井喜作と『Ost=Asien』への言及がみられる。なおこの書籍についての詳細は、筆者による書評を参照されたい(2001; c)。

④『ベルリン大学における日本人学生名簿』

1879年(明治12)から1914年(大正3)の期間と言えば、ベルリン大学が多くの分野で優れた研究成果を

世界に向けて発表していた時代であった。この時期にベルリン大学に留学した日本人を調査するためには、ハルトマン, R. の『ベルリン大学における日本人学生名簿—1879-1914—』(1997b)が非常に便利である。この名簿には各人の専攻と住所と肩書きが記されており、2000年の第2版では人名が漢字になっているので、一層人名の確定がしやすくなった。

これにより、玉井喜作は1895年夏学期から1896年夏学期まで、また老川茂信は1904年冬学期から1907年夏学期まで同大学に在籍し、いずれも法律学を専攻したことがわかる(1997b; 48, 60)。なおこの本は日本でも紹介された(1998a)。ついでながら、吉野俊彦『カイゼル髭の恋文—岡野敬次郎と森鷗外—』(1997c)の巻末にも、1892-1895年のベルリン大学留学生一覧表があり、ここにも玉井が掲載されている。ただし誤植で、Tamai KisakではなくTanai Kisakuとなっている。

2) 日本から見た玉井喜作

①『明治欧米見聞録集成』

次に日本側から見た玉井喜作像を見ておきたい。玉井がベルリンで暮らした前後に、日本からドイツなどに留学した人々には、帰国後その体験を書物に残した者もいた。今ではほとんど入手不可能なそれらの一群の書物が、近年『明治欧米見聞録集成』(全36巻、ゆまに書房、1987-1989)として覆刻されている。それらの中に、玉井喜作・老川茂信・『Ost=Asien』・ベルリン大学の学生気質・ベルリンの日本クラブなどに言及したものがあり、当時の雰囲気を知ることができる貴重な文献となっている。建部遯吾『西遊漫筆』(1902a; 202-208)、荻野萬之助『外遊三年』(1907a; 466-473, 516-523)、石川周行『世界一周画報』(1908a; 414-427)、中村吉蔵『欧米印象記』(1910c; 350-351)などがそれである。

石川周行の『世界一周画報』は、朝日新聞主催の世界一周旅行団の記録である。『Ost=Asien』通巻120号(1908年6月号10巻12号)495頁の写真「ベルリンにおける日本初の世界一周旅行団」は、この時のものである。この旅行団は1908年(明治41)3月18日に横浜を出航し、同年6月21日に敦賀港に帰着している。

この『明治欧米見聞録集成』には入っていないが、巖谷小波(季雄)の洋行記録(1903b)と回顧録(1920a; 231)は、彼が玉井と親しかっただけに貴重な資料である。特に前者は、1900-1902年(明治33-35)に巖谷がベルリン東洋語学校講師を務めた時代の記録であり、既述のように(2003a; 52-53, 2004b; 54-56)、ベルリン時代の玉井を知るために必須の文献となっている。なお『波の跫音』(1974b)は、巖谷の子息が書いた巖谷小波の伝記である。

この巖谷小波の後任として、1902-1916年/大正5まで14年間ベルリン東洋語学校講師を務めた人物が辻高衡である。上村直己「ベルリン東洋語学校講師・辻高

衡」(1994a)は彼の伝記であり、当時の同校の雰囲気を知るために得難い資料である。また著者の上村は、辻高衡のベルリンでの住所を『Ost=Asien』の住所録から調べたと記している(1994a; 43)。

②獨逸学協会学校関係の文献

既述のように、玉井喜作と獨逸学協会学校との関連は深く、同校関係の文献には、玉井に関係する記事がよく掲載されている。以下出版年代の古い順に挙げてみると次のようになる。『獨協学園七十五年史』(1959a; 146-147)には、1901年の獨逸学協会学校の火災と、その再建の折のフェン, H. 教授の大理石壁面の寄贈が記されている(2003a; 67-69参照)。『獨協百年』第2号(1979e; 391-393)には、藤代禎輔・巖谷小波の留学に関する資料が掲載されている(2004b; 54-56, 71-72参照)。

また『獨協百年』第3号(1980b)の口絵には、ベルリンでの大村仁太郎の送別会の写真があり、玉井も写っている。また同号には、『Ost=Asien』通巻50号(1902年5月号5巻2号)の記事「1902年4月3日ベルリンでの和独会の東京祭」と、「東京祭における大村仁太郎教授の挨拶」の翻訳も掲載されている(1980a; 305-311。また2003a; 67-69参照)。そして『獨協百年』第5号には、上記の記事「和独会の東京祭」の原文が転載されている(1981d; 688-690)。また同号には、ベルリンで巖谷小波に日本語を学んだブットマン, R. が、1930年(昭和5)秋に獨逸代理総領事の肩書きで巖谷の思い出を記した文章も掲載されている(1981d; 605-607。2003a; 51の写真左から3人目がブットマン, R. である)。最後に『目でみる獨協百年』には、『Ost=Asien』から転載された写真や玉井喜作に関係する記事が目立っている(1983b; 64-65, 68-69, 71など)。

③絵葉書その1～花祭り(1901年4月8日)

官製の絵葉書の最初は、1870年の普仏戦争の折のものであるとされている。19世紀末には、ヨーロッパで絵葉書が大流行した。一方、日本で私製の絵葉書の発行が認められたのは、1900年(明治33)10月であった。つまり、玉井喜作が『Ost=Asien』を発行していた19世紀末から20世紀初頭の時期は、ヨーロッパでは絵葉書が大流行し、日本でもやっと私製の絵葉書が許可された時代であったことがわかる。そのような時代背景もあって、玉井は『Ost=Asien』を刊行する傍ら、かなり多くの絵葉書を作成している。パンツァー, P. 「芸者、夜のおとぎ話—ヨーロッパに流布した日本イメージの絵葉書—」(2000d)は、実例を挙げながら、このような絵葉書の持つ歴史的資料としての価値を詳しく論じている。

以下、玉井の作成した絵葉書をいくつか紹介しておきたい。まず佐藤健二他「絵葉書のうらがわ」には、玉井が作成した巖谷小波の写真の絵葉書が掲載されて

いる(2002d; 5)。また秋山公道『絵はがき物語』には、玉井喜作が作成した絵葉書が6枚掲載されている。1901年4月8日; 花祭り記念写真、同年4月26日; 和独会記念写真、同年6月28日; 和独会のシュラッハテン湖への遠足などである(1988a; 15-20)。

上記の花祭りの絵葉書には13人の人物が写っており、これは以前拙稿においても掲載した(2004b; 55)。白須浄真『大谷探検隊とその時代』(2002e)は、この13人の中の藺田宗恵(後列左から5人目; 西本願寺の学校文学寮の第4代学長)について論じたものであり、被写体となった他の人物の紹介も記されている。また遠山嘉雄「ドイツ留学生の絵はがき」(1986e)は、同じくこの絵葉書の中の宮本叔(右から4人目; 1899冬学期-1902冬学期ベルリン大学在籍、医学専攻。帰国後東京大学教授。伝染病理学の基礎を確立した)について論じている。著者の遠山は宮本叔の娘婿にあたる。その掲載紙『向陵』は旧制第一高等学校の同窓会誌であるが、遠山の続稿「ドイツ留学生の絵はがき(訂正補遺)」(1991c)には、玉井喜作への言及がみられる。

このように人物の写真を絵葉書にしたものは、被写体となった人々の子孫から様々な言及がみられる。また景色を写した絵葉書は、歴史的に貴重な映像記録となる場合もある。

④絵葉書その2～萩城とHiller, R.

山口県萩市にあった萩城は、1874年(明治7)3月に解体された。現在も再建されていないので、その姿を知る者はほとんどいない。しかしこの萩城の写真が、1900年(明治33)10月に玉井喜作の作成した絵葉書で甦った。詳細は「防長幻視行・1」(1978a)、田中助一編著『写真集 明治大正昭和 萩』(1982b; 154)、湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(1989c; 186-187)、郡司健「ベルリンの玉井喜作とR. Hiller—1900年の日独交流の一齣—」(2005c; 39-42)に詳しいが、要約すると次のような経緯があったことがわかる。

ドイツ人ヒラー, R. は、お雇い外国人として、1872-1875年(明治5-8)に萩の明倫館でドイツ語を教えた。その時の教え子に山根正次(医学者、後に帝国議会議員及び枢密顧問官)がいた。後年山根は、パリ万博の折の出張で1900年秋に渡欧し、ベルリンにも立ち寄る。その時に旧師ヒラー, R. と四半世紀ぶりに再会し、萩城の写真とも出会った。その写真は、すでにその年の『Ost=Asien』通巻26号(1900年5月号3巻2号)に掲載されていたものであった。そしてそれを玉井喜作が絵葉書にしたので、幻の萩城が甦ったということである。このように1枚の絵葉書を通じて、様々なドラマが生まれている。なおこの件に関しては、拙稿「『Ost=Asien』研究その2」(2003a; 43-44)も参照されたい。

⑤玉井喜作、ウィーンで窮状の新橋芸者を救う

1900年(明治33)のパリ万国博覧会の折、東京の新

橋島森の芸者8人を中心とする一行が、パリに渡って舞台に出演した。一行は、万博終了後もヨーロッパ各地で興行をしながら、旅を続けた。デンマークからロシアに入り、1901年の正月はモスクワで迎えている。さらに彼らはポーランド、ハンガリーを経てウィーンまで行ったが、ここでアメリカ人のマネージャーに売上金を持ち逃げされ、窮地に陥った。その一行を救ったのが、ベルリンの玉井喜作であった。1901年4月3日に無事ベルリンに着いた一行は、ここで興行を行うことができ、一息つくことが出来た。そしてこの時、ウィーンからベルリンの玉井に助けを求めに行ったのが、一行の世話係を担当していた奥宮健之であった。彼は後に大逆事件(1910-1911)で死刑になった。

この話は様々な文献に記されている。古い順に列記すると次のようになる。宮岡謙二『異国遍路 旅芸人始末書』(1959b; 87-99)、木村毅『海外に活躍した明治の女性』(1963e; 173-177)、絲屋寿雄『奥宮健之』(1972a; 120-124)、泉巖「芸妓に舞う明治のベルリン」(1986d)、平井正『ドイツ旅の心得 日本人のドイツ、ドイツ人の日本』(1993a; 96)、倉田喜弘『海外公演事始』(1994b; 190-204)、横田順彌『明治不可思議堂』(1998b; 185-191)、横田順彌『明治は謎だらけ』(2002a; 37-48)。

『Ost=Asien』通巻39号(1901年6月号4巻3号)114頁には、一行の芸者8人の写真が掲載されており、玉井はこれも絵葉書にしている。またこの年の暮れには、川上貞奴一座もベルリンを訪れている(1985a; 359)。この島森芸者の一行と、川上貞奴一座のヨーロッパでの上演に関しては、他日稿を改めて詳しく論じていくことにしている。

V. 帰国後の遺族～老川茂信の新資料から

1. 札幌の豊平館における老川茂信

玉井喜作がベルリンで亡くなったのは、1906年(明治39)9月25日であり、残された家族は、妻エツと子ども3人(三女文子・四女喜代子・長男太郎)であった。彼らは、同年暮れか1907年初頭には日本に帰国している。一方、『Ost=Asien』の後継誌『Japan und China』を刊行した老川茂信は、1926年までヨーロッパに滞在し、同年暮れに帰国した(2005b; 34, 43-44)。

老川に関しては1929年までの足跡はわからなかったが、最近彼に関する2件の資料をさらに発見した。一つは新聞記事(1927a)であり、今一つは老川の手紙(1934a)である。前者は『北海タイムス』1927年(昭和2)1月31日の記事、「老川氏歓迎会 札幌豊平館にて」というものである。これは、彼が帰国直後に札幌に行ったことを示す記事である。少し長くなるが、老川の足跡を知る上で意味のある記事なので、以下全文を紹介しておきたい。なお旧字体の漢字は新字体に直

し、句点が全くついていないので、読みやすいように適宜句読点を補った。

老川茂信氏来札に就き、洋行中独逸に於いて親交ある北大教授連其他、関係者の晩餐会を30日午後6時より札幌豊平館に於いて開催。

出席者、須田金之助、秦勉造、服部教一、高岡熊雄、青葉萬六、今裕、山田勝伴、山田幸太郎、柏岡清勝、岡田天洞。

デザートコースに入るや服部氏は主催者側を代表し、「老川氏は在独25年、あらゆる事柄に精通して同国を通過する日本人にして君の世話にならぬものは無いという有様だ。いわば君は独逸を知ることにおいて日本の国宝である。今後該博の識見を以て日本民族の幸福の為に寄与せられたい」と述べ、之に対し老川氏は謙遜なる態度で謝辞を述べたる後、「独逸と日本とはその国情に於いて相似たるものがある。人口と食料の調節に全力を傾注しているが、戦後の復興のためには工業振興を国是として猛進し、急激にその効果を挙げつつあるが、此の基礎を為すのは学術であり、現に独逸は学術応用を工業方面に普遍的ならしむる教育方針を確立した。しかも之を指導するものは学者である。我国に於いても此の意味に於いて学者を尊重することを要望し、各位の健在を祈る」と結び、別室に於いて政治、経済、外交等に関する歓談尽くるところを知らず、各自大いに得るところあり。10時過ぎ散会した。

2. 帰国後の遺族

今一つの手紙は、老川が1934年(昭和9)年5月23日に、当時北海道帝国大学総長であった高岡熊雄に宛てて書いたものである。この時玉井喜作の遺族は、ドイツから帰国後すでに30年近くを日本で暮らしていた。その手紙の内容は次のようなものであった。

玉井喜作の遺族(未亡人エツ、長男夫婦とその子供2人)が、「其の後零落今日の生活にも困る状態」なので、この際名士数名の発起人をたてて贖金し、生活資金をいくばくかなりとも援助したい。東京方面では長嶋鷲太郎博士などが発起人を承諾。ついで北海道方面では高岡熊雄博士か松村松年教授に発起人をお願いしたいというものである。この件に関するその後の経緯は不明である。

老川に関する昨年の拙稿では、1927年(昭和2)の講演記録と1929年の新聞記事を紹介したが、これで1934年までの老川の足跡はつかめたことになる。この時の老川の住所は、東京市世田谷区北澤5丁目809となっている。

VI. 玉井喜作再発見の道のり

1. 人名事典の変遷

玉井喜作像の変遷を知るには、種々の人名事典が役立つ。戦前の事典で「玉井喜作」の項目がみられるのは、現在3冊見つかっている。出版年の順には『明治過去帳』(1935a)、『大日本人名辞書』(1937a)、『日本人名大事典』(1937b)となる。しかし、1937年の『大日本人名辞書』は第11版なので(1980年の復刻版; 講談社学術文庫全5巻はこれを底本にしている)、おそらくこれが一番古いものであろう。これら3冊の記述では、家族の名前の漢字の間違いなどの誤記は多少みられるものの、ほぼ正確に玉井の生涯を伝えている。

しかし戦後の英語の人名事典『The Japan Biographical Encyclopedia & Who's Who』(1958a)では、玉井はベルリンで新聞記者をした後に帰国し、東京で『Ost=Asien』を刊行したという大きな誤記がみられる。そして、その事典からほぼ四半世紀後の『海を越えた日本人名事典』(1985b)では、ドイツ到着が1928年となっている所のみ誤記であるが、それ以外はほぼ玉井の全体像を伝えている。21世紀になると、『日本人名大辞典』(2001g)のような一般的な人名事典にも玉井は掲載されるようになった。

以上の人名事典の記述内容の変遷は、日本における玉井喜作像の変遷ともほぼ対応しているように思われる。1958年(昭和33)の英語の人名事典発行の頃は、日本で玉井に関する関心が最も薄れた頃であったと言えるであろう。

2. 3つの波

玉井喜作再発見には、これまで3つの波があったと考えられる。第1は第二次世界大戦末期(1942a-d, 1944a-b)。第2は『シベリア隊商紀行』(1963b)の翻訳刊行。第3は湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(1989c)以降である。第1は既述のように、日独伊三国軍事同盟(1940)を背景として、玉井は明治時代にシベリアを横断し、ベルリンで日独交流に尽くした人物として注目された。第2は、玉井の原著出版後65年後のことであり、これによって初めて彼のシベリア横断が日本語で読めるようになった。しかしもっと広い範囲で玉井が注目されるようになったのは、やはり第3の波以降のことである。ここでは、この第3の波の経緯を簡単に振り返っておきたい。

3. 第3の波

1) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』

第2の波以降、玉井喜作への注目は、まず故郷の山口県光市で始まった。『光地方歴史物語』(1979d)と『光井郷土史話』(1980c)の中の玉井に関する記述がそれである。その後、玉井喜作を大叔父とする泉巖が玉井

に関する諸資料を収集し、山口県出身の作家湯郷将和に伝記の執筆を依頼した。そして完成したのが『キサク・タマイの冒険』(1989c)であった(同書の書評・紹介は1988b, 1989a-b, d-u, 2000c)。これは玉井喜作の初めての本格的な伝記であり、これによって、彼のベルリンでの仕事・生活が明らかにされた。この著作の刊行がきっかけとなって、玉井喜作は、『国際交流につくした日本人5. ヨーロッパII/ソ連』(1991b)のような子ども向けの書籍や、『世界を追跡! おどろき日本人史』(1993c)のような一般向けの書籍にも取り上げられるようになった。

その間、光市文化センターは、泉巖の収集した諸資料を中心にして「玉井喜作展」を開催している(1985c, 1986b)。また泉巖は、ベルリンの玉井宅における寄せ書きを覆刻し(1986a)、それに基づくエッセイを日本経済新聞に書いた(1986d)。前者の寄せ書きの覆刻は、その後の『Ost=Asien』研究において大変役立つことになった。また後者の新聞の影響は大きく、これをきっかけとして、高岡熊雄(北海道帝国大学教授)の息子高岡英夫、宮本叔(東京帝国大学教授)を岳父とする遠山嘉雄(1986e, 1991c)、近代日本の医学史を研究している比企寿美子(1999f; 62-63に玉井喜作への言及がみられる)など多くの方々から問い合わせがあり、新たな史料の発見につながっていった。

2) 大島幹雄・新村俊武

ベルリンの玉井喜作を初めて紹介した著作が『キサク・タマイの冒険』であったのに対し、玉井のシベリア横断を初めて彼の日記から再構成した著作が、大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』(1998e)であった。後者によって、『シベリア隊商紀行』では読み取れなかったような、玉井のシベリア横断の過酷な旅の様子が浮かび上がってきた。

さらに新村俊武「国際ジャーナリスト 玉井喜作」(2001e)は、5回にわたって産経新聞に連載されたものであり、コンパクトなサイズの中に玉井喜作のすべてが要点を押さえて的確に記述されている。玉井の全体像を知りたい時に、現在一番役立つ著作である。これも初出が新聞というメディアであったために、玉井喜作の紹介に大変大きな役割を果たすことになった。

その後さらに、『Die Brücke かけ橋』(2001f)や『伝説の旅人』(2001d)においても玉井喜作が取り上げられている。前者は日独協会の機関誌であり、これは全30回の連載「日独文化交流を支えた人々」というシリーズの中で、玉井喜作が取り上げられたものである。このシリーズは近々書籍として出版される予定になっている(2004d)。

このように、最近では玉井喜作への言及があちこちで見られるようになったが、意外な所でというケースもある。作家の出久根達郎は、「『志学の日』ウソの効用を学ぶ」(2002c)において、物理学者長岡半太郎のベ

ルリン留学時代の思い出話の中に、玉井喜作が登場することを紹介している。これなど、その一つの例である。

3) 泉健『『Ost=Asien』研究』シリーズ

従来の玉井喜作に対する評価は、冒険家としての側面に偏っていた。筆者は、彼のベルリンでの活動にももっと注目してみたいと考えている。そこでまず、『Ost=Asien』という雑誌そのものをもう少し詳しく調べてみようと思い、2002年から、勤務先の紀要などに少しずつ調査結果を発表するようになった(2002b, 2003a, 2004b, c)。その結果、『Ost=Asien』には、19世紀末から20世紀初頭への世紀転換期における、日独を中心とした政治・貿易・経済・文学・音楽・演劇・美術などの様々な論文・エッセイが含まれていることがわかった。

そこで次に、玉井が暮らした世紀転換期のベルリンの時代背景や、当時の彼の生活及び交友関係などを明らかにし(2001c, 2004e, 2005b)、玉井に関するこれまでの文献も整理した(2006a)。今後はこれらの基礎的なデータを基にして、『Ost=Asien』の中の音楽・演劇など芸術関係の記事を分析し、世紀転換期のベルリンにおける音楽生活の様子や、日本伝統音楽の受容の様相などを研究していきたいと考えている。

さらに、音楽学以外の各分野の専門家が、『Ost=Asien』掲載の諸論文の分析を通じて、それぞれの領域における研究成果を積み上げていけば、それが玉井喜作再発見の第4の波となっていくかもしれない。昨年すでに、郡司健「ベルリンの玉井喜作とR. Hiller—1900年の日独交流の一齣—」(2005c)のようなすぐれた研究が現れているので、この第4の波は実際に起こりつつあると言えるであろう。

おわりに

昔、大学院の学生であった頃に、ドイツ、フランス、イギリスなどに1ヶ月ばかり滞在したことがある。あの頃はまだ冷戦時代の最中であったため、ロシアの上を飛ぶことはできず、羽田を発った後、アンカレッジ、北極経由でヨーロッパにたどり着いた。数年前に約1年間ボン大学で過ごした時は、ソ連も崩壊し、ドイツ統一もなされた後であった。ジェット機はシベリアの上空を飛び、モスクワを下に見てフランクフルト空港に到着した。わずか11時間30分足らずのフライトであった。昔に比べるとずいぶん早くなったと痛感した。シベリア上空を飛ぶ時には天気が良かったので、地上が見えた。100年余り前の真冬に、玉井喜作はこの下の零下何十度という厳しい寒さの中を、橇や馬車などに乗り1年4ヶ月もかけてベルリンに向かったのかと思うと、感慨ひとしおであった。

玉井は、書斎や研究室にこもって一つのことを緻密

に追究していく学者タイプの人間ではなかった。人には、向き不向きというものがあるようで、彼はやはり、ジャーナリスト向けの性格をしていたのであろう。ベルリンで過ごした12年半、『Ost=Asien』の編集・刊行に全力を注いだ彼の人生は、やはり彼ならではのものであったと言える。

2005-2006年は、日独の経済界を中心として、「日本におけるドイツ年」という企画が展開中である。玉井喜作は、ベルリンの独日協会(和独会)や日本クラブの活動を通じて、日独交流にも意を注いだ。彼の没後100年目に刊行する本稿が、日独交流史の研究にも何らかの役割を果たすことができれば幸甚である。

【注】

- 1) 「北海道大学沿革写真一覧」(北海道大学附属図書館>電子展示>北海道大学沿革写真一覧)
<http://www.lib.hokudai.ac.jp/multihokudai/enka-ku/photo.html>
- 2) 高岡熊雄の専門領域における業績の学説史的位置づけ、及びその歴史的位置づけに関しては、竹野学「植民地開拓と「北海道の経験」—植民学における「北大学派」—」(2003c)に詳しい。
- 3) 2005年の7月21日から9月20日まで国立国会図書館で、「明治の越境者たち—近代デジタルライブラリー収録資料に見る日本人の海外体験—」という展示が行われた。ここでは、主に明治期の文献から日本人の海外体験について書かれたものが紹介されており、中村直吉と大庭公の書籍も展示された。
- 4) 「玉井喜作 イルクーツク艱難日記」(大島幹雄「デラシネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作イルクーツク艱難日記)
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/tamai/irkutsk-index.htm>
- 5) 「玉井喜作 イルクーツクートムスクの旅」(大島幹雄「デラシネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作 イルクーツクートムスクの旅)
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/tamai/tomsk-index.htm>
- 6) 「玉井喜作研究への誘い」(大島幹雄「デラシネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作研究への誘い)
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/tamai/toua.htm>
- 7) 「玉井喜作と若宮丸漂流民の接点をさぐる」(大島幹雄「デラシネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作と若宮丸漂流民の接点をさぐる)
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/zenroku/tamawaka-index.htm>
- 8) 大塚仁子「玉井喜作と「東亜」」(大島幹雄「デラシネ通信」>漂流民>玉井喜作>玉井喜作と「東亜」)
<http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/tamai/otsuka.htm>
- 9) 「シベリア隊商紀行と『世界周遊実記』」(大島幹雄「デラシネ通信」>漂流民>善六/レザーノフ>玉井喜作と若宮丸漂流民の接点をさぐる>第一回シベリア隊商紀行と『世界周遊実記』)
[http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/zenro-](http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/zenro-ku/tamawaka-01.htm)

[ku/tamawaka-01.htm](http://homepage2.nifty.com/deracine/draft/zenro-ku/tamawaka-01.htm)

- 10) 「Japan und China 通巻号表」(泉健「日々あれこれ」>玉井喜作記念館>Japan und China 通巻号表)
<http://www2u.biglobe.ne.jp/~izumi/Japan%20und%20China.htm>
- 11) このために、ゴルヴィッツァー, H.『黄禍論とは何か』におけるように、「ナルタキ」(鳴滝)を日本人と誤解するようなケースも生まれている。(1999i; 190-191, 245-248)

【インターネット資料】

- 1) 北海道大学附属図書館
<http://www.lib.hokudai.ac.jp>
- 2) 大島幹雄「デラシネ通信」
<http://homepage2.nifty.com/deracine/>
- 3) 泉健「日々あれこれ」
<http://www2u.biglobe.ne.jp/~izumi/index.html>

【引用文献：年代順】

本稿の性格上、文献は年代別に配列した方が玉井喜作像の変遷を把握しやすいと思われる。従って以下の引用文献表は通例とは異なり、筆者名順ではなく年代順に文献を配列し、同年のものは刊行順にa, b, cをつけて区別した。そして本文では、出版年とアルファベットと頁数で引用箇所を示している。例えば(1963b: 187-188)は、1963年のbの文献の187-188頁の意味である。

【明治時代】

1895 (明治28)

- a; Eine japanische Reise um die Welt vor 100 Jahren. I. Übersetzt von Kisak Tamai., Globus. Illustrierte Zeitschrift für Länder-und Völkerkunde. Vereinigt mit der Zeitschrift "Das Ausland". hrsg. von Richard Andree, Braunschweig. Bd.68, s.320-323. (以下出典はGlobusと略。邦訳『シベリア隊商紀行』の付録「百年前、日本人数名によるシベリア経由の世界紀行」の序と1~3の部分。)
- b; Eine japanische Reise um die Welt vor 100 Jahren. II. Übersetzt von Kisak Tamai., Globus. Bd.68, s.333-334. (同上「百年前、日本人数名によるシベリア経由の世界紀行」の4の部分。)

1896 (明治29)

- a; Eine japanische Reise um die Welt vor 100 Jahren. III. Übersetzt von Kisak Tamai., Globus. Bd.69, s.95-98. (同上「百年前、日本人数名によるシベリア経由の世界紀行」の5の部分。)
- b; Die Erforschung des Tschinwan-Gebietes auf Formosa durch die Japaner. Mitgeteilt von Kisak Tamai., Globus. Bd.70, s.93-98.
- c; Erdbeben und Flutwelle vom 15. Juni 1896 in Japan. von Kisak Tamai., Globus. Bd.70, s.131.
- d; Bericht über die Ausgrabungen an dem Muschelhügel von Shiizuka, Hitachi (Japan) von S.Yagi und M. Shinomura. Aus dem Japanischen übersetzt von Kisak Tamai. (Bulletin of the Tokyo Antropol. Soc. VIII, Nr.87, Juni 1893, S.336-388.), Globus. Bd.70, s.154-158
- e; Japanische Blutrache gegen die Koreaner. von Kisak Tamai., Globus. Bd. 70, s.329-331.

f ; Drei japanische Fabeln. 1. Der junge Tiger (Tora-no-Ko), 2. Das Affenjahr (Saru-no-Toshi), 3. Die Krabbe (Kani-no-Yokoboi), von Kisak Tamai., Globus. Bd. 72, s. 192-193.

1898 (明治31)

a ; Kisak Tamai. Karawanen-Reise in Sibirien. Berlin, Karl Siegmund. 1898. (邦訳: 1963b)

b ; Ost=Asien. Bd. 1-12. 1898-1910. Berlin. Verlag von Kisak Tamai.

c ; Kisak Tamai. Vorwort. Ost=Asien, Nr. 1, 1898, I-1, s. 2. (通巻1号I巻1号。以下『Ost=Asien』の号数表示は同様の略記法による。)

d ; 玉井喜作「本誌発行の趣旨」。Ost=Asien, Nr. 1, 1898, I-1, s. 3

e ; 札幌農学校學藝會編『札幌農学校』(豪華房)、復刻版『覆刻札幌農学校』(北海道大学図書刊行会、1975, 2005²)

1900 (明治33)

a ; Siebold, Alexander G.G. von. Der Eintritt Japans in das europäische Völkerrecht. Berlin, Verlag von Kisak Tamai, hrsg von Monatsschrift "Ost=Asien".『欧州国際団体ニ日本ノ加入』(邦題並記)

b ; Siebold, Alexander G.G. von. Rundschau am politischen Horizont Ostasiens. Berlin, Verlag von Kisak Tamai, hrsg von Monatsschrift "Ost=Asien". (『東アジアの政治的視界に関する展望』)

1902 (明治35)

a ; 建部遜吾『西遊漫筆』(哲学書院)、復刻版『明治見聞録集成』第25巻(ゆまに書房、1989)

1903 (明治36)

a ; Siebold, Alexander G.G. von. Ph. Fr. von Siebold's letzte Reise nach Japan 1859-1862. Berlin, Verlag von Kisak Tamai, hrsg von Monatsschrift "Ost=Asien".『フクリップ フランツ フォン ジーボルト 最終日本紀行』(邦題並記)

b ; 巖谷季雄『洋行土産 上・下』(博文館)

1905 (明治37)

a ; Stern, Albert. In deutscher Erde.—Aki Tamai. Ost=Asien, No. 92, 1905, VIII-8, s. 312f.

1906 (明治39)

a ; Kisak Tamai †. Ost=Asien, No. 102, 1906, IX-6, s. 231 ff.

b ; 「玉井喜作没」『大阪朝日新聞』9月29日

c ; 「玉井喜作没」『大阪朝日新聞』9月30日

d ; 「玉井喜作没」『大阪毎日新聞』9月30日

e ; 「玉井喜作没」『大阪時事新報』9月30日

1907 (明治40)

a ; 荻野萬之助『外遊三年』(小林書店)、復刻版『明治見聞録集成』第27巻(ゆまに書房、1989)

1908 (明治41)

a ; 石川周行『世界一周画報』(博文館)、復刻版『明治見聞録集成』第30巻(ゆまに書房、1989)

b ; 中村直吉, 押川春浪編『亜細亜大陸横行；五大州探検記第一巻』(博文館)

c ; Deutsch-Japanische Gesellschaft (Wa-Doku-Kai). Jg. 1-2, 1908-1909. Berlin: Druck von G. Ohme.

d ; Zum 10 jährigen Bestehen der Monatschrift 《Ost=Asien》. Ost=Asien, No. 121, 1908, XI-1, s. 11

e ; Erste Mitteilungen betreffend die Kollekte für das Erziehungskapital der Kinder des verstorbenen Chefre-

-dakteurs Kisak Tamai. Ost=Asien, No. 123, 1908, X I-3, s. 122f.

1910 (明治43)

a ; Mitteilungen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai). Jg. 3-5, 1910-1912. Berlin: Deutscher Verlag.

b ; Anonym. "Die Entwicklung der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) in der ersten zwanzig Jahren ihres Bestehens" in: Mitteilungen der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai). Jg. 3 Nr. 12 s. 93ff.

c ; 中村吉蔵『欧米印象記』(春秋社書店)、復刻版『明治見聞録集成』第33巻(ゆまに書房、1989)

d ; 中村直吉, 押川春浪編『亜米利加一周；五大州探検記第四巻』(博文館)

1912 (明治45)

a ; 中村直吉, 押川春浪編『欧洲無銭旅行；五大州探検記第五巻』(博文館)

【大正時代】

1920 (大正9)

a ; 巖谷小波『「おとぎばなし」をつくった巖谷小波：我が五十年』(東亜堂)、復刻版(ゆまに書房、1998)

1925 (大正14)

a ; 大庭柯公『露国及び露人研究』(柯公全集刊行会)、(中公文庫、1984年)

【昭和時代・戦前】

1927 (昭和2)

a ; 「老川氏歓迎会 札幌豊平館にて」『北海タイムス』1月31日

1931 (昭和6)

a ; アレキサンデル・フォン・シーボルト『シーボルトの最終日本紀行』(小沢敏夫訳、駿南社)。ジーボルト, A.『ジーボルト最後の日本旅行』(斎藤信訳、平凡社1981)

1932 (昭和7)

a ; 『東京帝國大学 五十年史』(東京帝國大学)

1934 (昭和9)

a ; 老川茂信書簡、北海道帝國大学総長高岡熊雄教授宛。5月23日付。

1935 (昭和10)

a ; 大植四郎『明治過去帳』(私家版)、新訂初版(東京美術、1971) p. 1002「玉井喜作」

1937 (昭和12)

a ; 『新訂版 大日本人名辞書』(東京経済雑誌社、増訂11版)、復刻版『大日本人名辞書』(講談社学術文庫、1980年) 第3巻 p. 1619「玉井喜作」

b ; 『新撰大人名辞典』(平凡社)、復刻版『日本人名大事典』(平凡社、1979) 第4巻 p. 213「玉井喜作」

1939 (昭和14)

a ; 第一高等學校編『第一高等學校六十年史』(第一高等學校)

1942 (昭和17)

a ; 「50年前“樞軸を予約”猛獣お伴のシベリヤ徒歩横断 伯林に微笑む 快漢『玉井』の像」『大阪毎日新聞』9月24日

b ; 「伯林めざす快男児 徒歩でシベリヤ横断 50年前日独提携の魁」『東京日日新聞』9月28日

c ; 「旧情慕う知人の便り シベリヤ横断快拳 玉井氏の母堂を慰む」『大阪毎日新聞』(山口版) 10月15日

d ; 小谷茂夫「日独親善の人柱 “私設公使” 玉井喜作を憶ふ」

『サンデー毎日』(通巻1201号) 10月18日号pp.46-48.

1944 (昭和19)

- a ; 太田為治「鉄道開通前のシベリヤの交通」『ハルビン東京外語同窓会報』1月31日発行pp.8-9.
b ; 「征槎紀行」『大阪朝日新聞』6月9日

【昭和時代・戦後】

1953 (昭和28)

- a ; 札幌市教育委員会編『札幌市史 政治行政篇』(札幌市役所)

1956 (昭和31)

- a ; 高岡熊雄回想録編集委員会編『時計台の鐘』(楡書房)、再版(新装版); 蝦名賢造編(西田書店、1998)

1958 (昭和33)

- a ; 『The Japan Biographical Encyclopedia & Who's Who』(連合プレス社) p.1621 「TAMAI Kisaku」
b ; 札幌市教育委員会編『札幌市史 文化社会篇』(札幌市役所)

1959 (昭和34)

- a ; 七十五年史編集委員会編『独協学園七十五年史』(独協学園)
b ; 宮岡謙二『異国遍路 旅芸人始末書』(修道社)、(中公文庫、1978)

1961 (昭和36)

- a ; 岩倉規夫「西比利亜征槎紀行のこと」『統計』9月号。後に同『読書清興』(汲古書院、1972)に所収。

1962 (昭和37)

- a ; 「70年前シベリア踏破 残っていた玉井青年の独文紀行 孫娘たち翻訳を計画」『朝日新聞』5月17日(下関版)

1963 (昭和38)

- a ; 小林健祐「シベリア隊商紀行—七十年前・一日本人の冒険記—」『芸林—郷土文化総合誌—』(芸林社)10巻2号、2月号pp.32-34.
b ; 玉井喜作『シベリア隊商紀行』小林健祐訳(筑摩書房)、中野好夫他編『世界ノンフィクション全集47』pp.185-287(原著; 1898a)
c ; 「還暦祝に間に合った翻訳 母に贈る祖父の日記 シベリア横断記実る」『朝日新聞』10月22日(下関版)
d ; 「世に出た『シベリア横断記』 半世紀前、玉井喜作氏の著作」『朝日新聞』10月22日(下関版)
e ; 木村毅『海外に活躍した明治の女性』(至文堂)

1965 (昭和40)

- a ; 北海道大学『北海道大学創基80年史』(北海道大学)

1969 (昭和44)

- a ; 長澤和俊『世界探検史』(白水社)

1972 (昭和47)

- a ; 絲屋寿雄『奥宮健之』(紀伊國屋書店)

1973 (昭和48)

- a ; 長澤和俊『日本人の冒険と探検』(白水社)

1974 (昭和49)

- a ; ハンス・ケルナー『シーボルト父子伝』竹内精一訳(創造社、原著出版は1967)

- b ; 巖谷大四『波の聲音』(新潮社)、(文春文庫、1993)

1976 (昭和51)

- a ; 北海道大学『写真集 北大百年—1876-1976』(北海道大学)

1977 (昭和52)

- a ; 堀淳一編著『札幌 日本の古地図15』(講談社)

1978 (昭和53)

- a ; 「萩城解体 ドイツで写真発見 貴重な絵はがきに」『毎日新聞』(山口版) 1月8日
b ; 札幌市教育委員会文化資料室編『札幌歴史地図 <明治編> さっぽろ文庫別冊』(北海道新聞社)

1979 (昭和54)

- a ; 朝日新聞社編『朝日新聞百年の記事にみる2 探検と冒険』
b ; 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第1号(獨協学園百年史編纂委員会)
c ; 太田雄三『クラークの一年—札幌農学校初代教頭の日本体験—』(昭和堂)
d ; 原田一恵他『光地方歴史物語』(瀬戸内物産出版部)「明治の大冒険家 玉井喜作」p.176
e ; 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第2号(獨協学園百年史編纂委員会)

1980 (昭和55)

- a ; 北海道大学編著『北大百年史 通説』(ぎょうせい)
b ; 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第3号(獨協学園百年史編纂委員会)
c ; 岩本忠一『光井郷土史話』(光地方史研究会)「明治の冒険家 玉井喜作」pp.210-218
d ; 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第4号(獨協学園百年史編纂委員会)

1981 (昭和56)

- a ; 北海道大学編著『北大百年史 札幌農学校史料(一)』(ぎょうせい)
b ; 北海道大学編著『北大百年史 札幌農学校史料(二)』(ぎょうせい)
c ; 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1981)
d ; 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第5号(獨協学園百年史編纂委員会)

1982 (昭和57)

- a ; 札幌市教育委員会文化資料室編『札幌写真集 <明治編>』(北海道新聞社)
b ; 田中助一編著『写真集 明治大正昭和 萩』(国書刊行会)
c ; 北海道大学編著『北大百年史 通説』(ぎょうせい)
d ; 井上靖『わが一期一会』(毎日新聞社)、(三笠書房・知的生きかた文庫、1993)
e ; 週刊朝日編『続・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1982)

1983 (昭和58)

- a ; 澤田助太郎『ブチト・アナコ：小さい花子』(中日出版社)、増補改訂版『ロダンと花子』(中日出版社、1996)
b ; 獨協学園百年史編纂委員会編『目でみる獨協百年』(獨協学園)

1984 (昭和59)

- a ; 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史(一)』(東京大学)

1985 (昭和60)

- a ; 白川宣力編著『川上音二郎・貞奴—新聞にみる人物像—』(雄松堂出版)
b ; 富田仁編『海を越えた日本人名事典』(日外アソシエーツ) pp.381-382. 「玉井喜作」
c ; 「玉井喜作(冒険家)の資料、子孫が寄託 光市文化センターへ44点」(新聞名・月日不詳)

1986 (昭和61)

- a ; 泉巖覆刻『玉井喜作宅における寄せ書き 自明治33年3月30日—至明治39年3月15日』(私家版)
b ; 「まず「玉井喜作展」; 光市文化センターのふるさと人物銘々伝」『山口新聞』1月7日
c ; 佐藤昌彦他編訳『クラークの手紙 札幌農学校生徒との往復書簡』(北海道企画出版センター)
d ; 泉巖「芸妓に舞う明治のベルリン 祖父の『寄せ書き』から

- 在住日本人の生活知る』『日本経済新聞』7月17日
- e; 遠山嘉雄「ドイツ留学生の絵はがき」『向陵』(旧制第一高等学校の同窓会誌) 10月号
- f; 北上次郎「酷寒のシベリアを横断した明治の無目的な冒険者・玉井喜作」『TARZAN』10月号
- 1988 (昭和63)
- a; 秋山公道『絵はがき物語』(富士短期大学)
- b; 「四季風」欄(湯郷将和『キサク・タマイの冒険』の刊行予告)『山口新聞』8月29日
- c; 北上次郎「玉井喜作伝」よ、早く出てこい!』『本の雑誌』9月号, No. 63, pp. 36-42. 後に目黒考二『活字三昧』(角川文庫, 1996) に所収。
- 【平成時代】**
- 1989 (平成1)
- a; 「百万塔」欄(湯郷将和『キサク・タマイの冒険』の紹介)『印刷ジャーナル』4月14日
- b; 「よみがえる明治の風雲児 シベリア単身横断・ベルリンで健筆」『週刊東興通信』4月12日
- c; 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(新人物往来社)
- d; 岩倉規夫「夜店でみつけた『西比利亞征伐紀行』」湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(1989c; 252-254)
- e; 書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『Businessインテリジェンス』5月号
- f; 書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『読売新聞』5月1日
- g; 書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『毎日新聞』5月1日
- h; 紹介: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『山口新聞』5月7日
- i; 紹介: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『周南日報』5月8日
- j; 紹介: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『朝日新聞』5月11日下関版
- k; 書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『日刊現代』5月13日
- l; 紹介: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『中国新聞』5月16日
- m; 「この人」欄(湯郷将和『キサク・タマイの冒険』の紹介)『毎日新聞』5月17日
- n; 「明治の冒険家玉井喜作」テレビ山口; TYSニュース6、5月24日18:00-18:30
- o; 書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『週間時事』6月3日
- p; 北上次郎「海を渡った近代日本人のドラマ 無目的な「冒険者」にみる異文化との衝突」『サンデー毎日』6月4日号
- q; 書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』『神戸新聞』6月13日
- r; 梶井純「冒険とナショナリズム 明治が生んだ型破りな人間」(書評: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』)『週刊読書人』6月26日号
- s; 池内紀・目黒考二対談「枠組みをはずした編集に活路」(紹介: 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』)『週刊読書人』6月27日号
- t; 「故湯郷将和氏の一周忌法要 『キサク・タマイの冒険』出版記念も」(7月9日: 東京田無市民会館)『印刷ジャーナル』7月21日
- u; 「明治の快男児讃える 『キサク・タマイの冒険』出版記念会 玉井喜作の半世紀描く」『印刷ジャーナル』8月25日

- v; 池田皓訳『環海異聞』(雄松堂出版、海外渡航記叢書2)
- 1990 (平成2)
- a; 大島幹雄『サーカスと革命—道化師ラザレンコの生涯—』(平凡社)
- 1991 (平成3)
- a; 大島正健著、大島正満・大島智夫補訂『クラーク先生とその弟子たち』(新地書房)、(初版1937、補訂再版1947、補訂三版1958)
- b; 伊地知晃子「玉井喜作」長沢和俊・寺田登監修『国際交流につくした日本人5 ヨーロッパⅡ/ソ連』(くもん出版) pp. 111-134
- c; 遠山嘉雄「ドイツ留学生の絵はがき(訂正補遺)」『向陵』(旧制第一高等学校の同窓会誌) 4月号
- d; 蝦名賢造『札幌農学校—日本近代精神の源流』(新評論)
- 1992 (平成4)
- a; 札幌市教育委員会文化資料室編『農学校物語 さっぽろ文庫61』(北海道新聞社)
- 1993 (平成5)
- a; 平井正『ドイツ旅の心得 日本人のドイツ、ドイツ人の日本』(光人社)
- b; 北上次郎選・日本ペンクラブ編『海を渡った日本人』(福武文庫)
- c; 世界かわら版編集部編『世界を追跡! おどろき日本人史』(青春出版社; 青春BEST文庫)
- d; 青木澄夫『アフリカに渡った日本人』(時事通信社)
- e; 大島幹雄『海を渡ったサーカス芸人—コスモポリタン沢田豊の生涯—』(平凡社)
- f; 宮永孝『日独文化人物交流史 ドイツ語事始め』(三修社)
- 1994 (平成6)
- a; 上村直己「ベルリン東洋語学校講師・辻高衡」日本独学史学会編『日独文化交流史研究』1994年号、pp. 39-53.
- b; 倉田喜弘『海外公演事始』(東京書籍)
- c; 前川公美夫『北海道音楽史』(大空社)、(再版: 亜璃西社 1995、2001²⁾)
- 1996 (平成8)
- a; Haasch, Günther. hrsg., Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften 1888-1996. Berlin: Wissenschaftsverlag Volker Spiess, 1996.
- b; 大島幹雄「ユーラシア・アドベンチャー(1)」『AVRORA オーロラ』10巻1号(通巻35) pp. 8-11 (アエロフロート・ロシア国際航空日本支社広報室)
- c; ドイツ-日本研究所編『シーボルト父子のみた日本 生誕200年記念』(ドイツ-日本研究所)
- d; 大島幹雄「ユーラシア・アドベンチャー(2)—玉井喜作のシベリア横断; ウラジオストックからイルクーツクまで」『AVRORA オーロラ』10巻2号(通巻36) pp. 8-11
- e; 大島幹雄「ユーラシア・アドベンチャー(3)—玉井喜作のシベリア横断; 玉井の故郷に眠るシベリア日記」『AVRORA オーロラ』10巻3号(通巻37) pp. 8-11
- f; 大島幹雄「明治にシベリアを横断した冒険者」『本の雑誌』8月号, No. 158, pp. 18-22
- g; 北上次郎選「海を渡った日本人」ブックガイド『本の雑誌』8月号, No. 158, pp. 22-25
- h; 大島幹雄「ユーラシア・アドベンチャー(4)—ベルリンの玉井喜作; 祖国のために」『AVRORA オーロラ』10巻4号(通巻38) pp. 8-11
- i; 大島幹雄『魯西亜から来た日本人—漂流民善六物語—』(廣済堂出版)
- 1997 (平成9)

- a ; Brenn, Wolfgang., Marie-Luise Goerke. hrsg., Berlin-Tôkyô : im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997.
- b ; Hartmann, Rudolf. Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914. Berlin, Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin, 1997. 2000².
- c ; 吉野俊彦『カイゼル髭の恋文—岡野敬次郎と森鷗外—』(清流出版)
- 1998 (平成10)
- a ; 「明治時代の独ベルリン大留学生～日本人700人の名簿完成」『日本経済新聞』2月6日
- b ; 横田順彌『明治不可思議堂』(筑摩書房)
- c ; クライナー, J. 『黄昏のトクガワ・ジャパニーズ—シーボルト父子のみた日本—』(日本放送出版協会)
- d ; 北上次郎『冒険家・玉井喜作を読む』『波』11月号 (新潮社)
- e ; 大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』(新潮社)
- 1999 (平成11)
- a ; Schmidt, Vera, hrsg. Alexander von Siebold ; Die Tagebücher A 1866-1892. Wiesbaden : Harrassowitz Verlag. (ACTA SIEBOLDIANA VII)
- b ; Schmidt, Vera, hrsg. Alexander von Siebold ; Die Tagebücher B 1893-1911. Wiesbaden : Harrassowitz Verlag. (ACTA SIEBOLDIANA VII)
- c ; Schmidt, Vera, hrsg. Alexander von Siebold ; Die Tagebücher C Anmerkungen und Register. Wiesbaden : Harrassowitz Verlag. (ACTA SIEBOLDIANA VII)
- d ; 書評：大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』『神奈川新聞』1月12日
- e ; 書評：大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』『東京新聞』1月31日
- f ; 比企寿美子『引導をわたせる医者となれ』(春秋社)
- g ; 「命をかけた氷原の冒険録」(書評：大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』)『奈良新聞』2月9日
- h ; 「光市出身の冒険家を紹介 『シベリア漂流 玉井喜作の生涯』」『毎日新聞』2月26日 (山口版)
- i ; ゴルヴィツァー, H. 『黄禍論とは何か』(草思社)
- 2000 (平成12)
- a ; 「編集者が読むべき100冊」(大島幹雄『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』を推薦)『編集会議』(宣伝会議)第3号、6月号
- b ; ニコライ・レザーノフ『日本滞在日記—1804-1805』大島幹雄訳 (岩波文庫)
- c ; 福田百合子「文学にみる「くらし」の変遷—「キサク・タマイの冒険」湯郷将和著—」『やまぐち経済月報』No.304, pp.63-65
- d ; バンツァー, P. 「芸者、夜のおとぎ話—ヨーロッパに流布した日本イメージの絵葉書—」『is』(ポーラ文化研究所) pp.25-39
- 2001 (平成13)
- a ; 北大125年史編集室編『北大の125年』(北海道大学)
- b ; 松村正義「義和団事変と欧州のアレキサンダー・シーボルト」『アジア太平洋討究』(早稲田大学アジア太平洋研究センター)第3号、pp.42-57.
- c ; 泉健「書評：Brenn, Wolfgang, Marie-Luise Goerke, hrsg., Berlin-Tôkyô : im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997.」『音楽学』46巻3号 pp.171-173.
- d ; 平野久美子「玉井喜作—ドイツで“青年よ大志を抱け”を敢行」平野久美子・文藝春秋「ノーサイド」編『伝説の旅人』(文藝春秋) pp.33-34
- e ; 新村俊武「国際ジャーナリスト 玉井喜作(1866-1906)」『産経新聞』10月16-19日、21日。後に「ドイツで健筆・国際ジャーナリスト 玉井喜作」として、産経新聞「日本人の足跡」取材班編『日本人の足跡三 世紀を越えた「絆」求めて』(産経新聞ニュースサービス、2002) pp.255-286に所収。
- f ; 河村繁一「日独文化交流を支えた人々 第2回玉井喜作」『Die Brücke かけ橋』No.548, 10月号 (財団法人日独協会) pp.4-6
- g ; 上田正昭他監修『日本人人名大辞典』(講談社) p.1196「玉井喜作」
- h ; 北海道大学125年史編集室編『写真集 北大125年—1876-2001』(北海道大学)
- 2002 (平成14)
- a ; 横田順彌『明治は謎だらけ』(平凡社)
- b ; 泉健『『Ost=Asien』研究～その1. 全目次』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集、pp.107-204
- c ; 出久根達郎「志学の日」ウソの効用を学ぶ『朝日新聞』4月1日
- d ; 佐藤健二他「絵葉書のうらがわ」『彷彿月刊』(弘隆社)9月号
- e ; 白須浄真『大谷探検隊とその時代』(勉誠社)
- 2003 (平成15)
- a ; 泉健『『Ost=Asien』研究～その2. 人名注解；外国人編』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集、pp.33-71
- b ; 北大125年史編集室編『北大百二十五年史 論文・資料編』(北海道大学)
- c ; 竹野学「植民地開拓と「北海道の経験」—植民学における「北大派」—」北大125年史編集室編『北大百二十五年史 論文・資料編』(北海道大学) pp.163-201
- d ; 長澤和俊「日本人の冒険と探検」『別冊太陽 日本の探検家たち』(平凡社)
- e ; 大島幹雄「吉郎次の墓と玉井喜作」石巻若宮丸漂流民の会編著『世界一周した漂流民』(東洋書店；ユーラシア・ブックレット54) p.58
- f ; 北大125年史編集室編『北大百二十五年史 通説編』(北海道大学)
- 2004 (平成16)
- a ; 大島幹雄『虚業成れり—「呼び屋」神彰の生涯』(岩波書店)
- b ; 泉健『『Ost=Asien』研究～その3. 人名注解；日本人編』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集、pp.43-79
- c ; 泉健『『Ost=Asien』研究～その4. 全目次；独語版』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集、pp.81-179
- d ; 「連載：日独文化交流を支えた人々 (Nr.1-30) 総目録」『Die Brücke かけ橋』No.580, 9月号 (財団法人日独協会) pp.6-8
- e ; 泉健「百年前のベルリンと曾祖父」『邦楽ジャーナル』Vol.215, 12月号 p.21
- 2005 (平成17)
- a ; 大島幹雄「徒歩でシベリア横断—玉井喜作記念館・光」長塚英雄・「日本とユーシア」紙編集部編『続々日本の中のロシア』(東洋書店；ユーラシア・ブックレット75) pp.14-15
- b ; 泉健「ベルリンの玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第55集、pp.27-50
- c ; 郡司健「ベルリンの玉井喜作とR.Hiller—1900年の日独交流の一齣—」『大阪学院大学通信』第36巻5号、pp.31-57
- 2006 (平成18)

a；泉健「文献に見る玉井喜作一没後100年を記念して」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第56集、pp.25-47

【正誤表】

今回シーボルト, A.のことを調査する上で、彼が無署名で『Ost=Asien』に投稿した論文が数多く見つかった。従って拙稿「『Ost=Asien』研究～その2. 人名注解；外国人編」(2003a)のシーボルト, A.の項目における『Ost=Asien』への投稿記録(62頁の下から4-6行目の部分)に、次の12箇所の通巻号数を追加しておきたい。

追加；4, 5, 13, 17, 21-24, 26, 28, 29, 30.

【付記1】

本稿を脱稿後、玉井喜作と老川茂信に関係する文献を2点入手したので、簡単に紹介しておきたい。井上靖『わが一期一会』には、明治時代にシベリアを横断した人物として玉井喜作の名が記されている(1982d, 1993；51)。澤田助太郎『ロゲンと花子』には、1910年頃ベルリンで、花子の夫である吉川馨が肺結核となった時に、その世話をした人物として老川茂信が登場している(1983a, 1996；80, 83)。

【付記2】

今回玉井喜作に関する文献目録を作成するに当たって、次の方々から種々の貴重な文献をご教示いただいた。それらを以下に、引用文献一覧で記した年号とアルファベットで列記しておきたい。

まず産経新聞社の新村俊武氏(2001e参照)からは次の数多くのご指摘をいただいた。1902a, 1906b-e, 1907a, 1908a-b, 1910c-d, 1912a, 1920a, 1925a, 1963e, 1972a, 1979a, d, 1993d, 1997c, 1998b, 1999i, 2000d, 2002a, d-e, 2003d。これらがなければ、今回の文献目録はかなり多くの不備を残したままに終わるところ

であった。本当にお礼の申し上げようもないほどである。

また大島幹雄氏(作家・早稲田大学非常勤講師・アフター クラウディ カンパニー勤務)からは、ベルリン大学時代の玉井喜作の仕事である1896a-fと、『Ost=Asien』の中のシーボルト, A.の論文を詳しく指摘した1974aの文献をご教示いただいた。いずれも『Ost=Asien』研究の要となる重要な文献であり、ここに記して深謝の意を表する次第である。

さらに大阪学院大学の郡司健教授からは2005cをお送りいただき、ヒラー, R.と萩城の写真との関連、さらに日本甲虫の研究に関する彼の寄与に関しても多くのご教示をいただいた。改めて深くお礼申し上げる次第である。

北海道大学附属図書館からは、26-27頁の写真1、28-29頁の写真3、29頁の写真4の3枚の写真の掲載を許可いただいた。玉井喜作赴任当時の札幌農学校を実際に目で見ることができ、大変貴重な資料となった。ここに記して謝意を表する次第である。なお本稿の写真全13枚の内、写真番号2, 5-9, 12, 13の8枚は筆者による撮影であり、10, 11は玉井喜作家のアルバムからのものである。

北海道大学の高岡熊雄教授のご子息高岡英夫氏からは、老川茂信関係の資料1927aと1934aを、また東京大学の宮本叔教授を岳父とする遠山嘉雄氏からは、玉井喜作作成の絵葉書に関する史料1986eと1991cを、それぞれ泉巖宛てにお送りいただいた。故人に代わってお礼申し上げる次第である。

高橋喜美子・高橋祐枝の両氏からは、1942a-d, 1944a, 1962a, 1963a, c-dのコピーをご提供いただき、また中山光世氏からは1998aをご送付いただいた。この3氏及び泉明子(2005b；47参照)は、玉井喜作の四女喜代子の娘である。今70～80歳代の彼女たちは、女学校の頃まで玉井喜作の未亡人エツとともに暮らしていたため、ベルリンの玉井喜作一家やエツの晩年に関して、様々な話を聞かせていただくことができた。